

# 玉体横穴群

発掘調査報告書

1991

静岡県小笠郡大東町教育委員会

文化財係







ぎよく    たい    おう    けつ    ぐん  
玉   体   横   穴   群

発掘調査報告書

1991

静岡県小笠郡大東町教育委員会





玉体横穴群遺跡全景（空中撮影）





# 序 文

年々、文化財の保護・保存が唱えられている中、これをいかに将来へ伝えていくかは、私たちに課された重大な使命であります。しかしながら、日本経済の発展とともに地域住民の生活向上などにより、開発整備をおこなわなければなりません。このような社会情勢においてバランスのよい町づくりが望まれる次第です。

こうした中で静岡県小笠郡大東町中方の玉体横穴群発掘調査は、「県営農地開発事業」に伴い、中遠農林事務所の負担を得て大東町教育委員会が実施しました。

この発掘調査により、横穴9基が検出されそのうち第3号横穴からは、直刀・鏡等が出土し、古墳時代の痕跡を知る上で極めて重要な資料が発見されました。

先人の残した文化財を大切にすることは、私たちの重要な務めであり、この調査報告書によって多くの皆様方が、文化財に対する関心を高めていただければ、幸甚であります。

終わりに今回の発掘調査にご指導・ご協力を賜ったみな様に心より感謝申し上げます。

ここに報告書を発刊し、多くのみな様のご供覧を賜り、あわせて各位のご批判とご指導をお願いいたします。

平成3年3月

静岡県小笠郡大東町教育委員会  
教育長 青野 行雄

# 例 言

1. 本書は、静岡県小笠郡大東町中方2392-1番地先に所在する玉体横穴群の発掘調査報告書である。
2. 調査は県営農地開発事業（茶園造成）に伴うもので、静岡県中遠農林事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと大東町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成元年6月28日から平成元年10月8日にわたり実施した。
4. 調査は大東町教育委員会の主体で、鬼澤勝人（社会教育課）が調査担当者となり、調査に際しては、大熊茂広（当時大正大学学生）ほか諸氏の応援を得た。また、佐東南土地改良区事務所には全面的な協力を得た。
5. 調査の開始より報告書の作成に至るまで下記の方々に御指導・御協力をいただいた。  
（順不同、敬称略）  
五島康司・澁谷昌彦・坂巻隆一・太田直樹・渡辺康弘・大川敬夫・川江秀孝・松本一男・塚本和弘・前田庄一・戸塚和美・足立順司
6. 出土品等の整理及び本書の作成は、鬼澤が中心に行い、飯田三生（社会教育課）溝口淳子（社会教育課嘱託）が補助した。
7. 本書発行までの一切の事務は大東町教育委員会が行った。尚、調査資料はすべて大東町教育委員会が保管している。
8. 協力者 佐東南土地改良区事務所  
理事長 石川安久理 他13名
9. 作業員  
増田秀一・中井己未・井垣忠志・相沢友次・前島 隆・石川時江・鈴木しま・鈴木豊治・鈴木喜代子・鈴木さだ子・石川 忍

# 目 次

第1章	調査に至る経緯	P 1
第2章	遺跡の位置と周辺環境	P 2
第3章	確認調査	P 3
第4章	調査の方法と経過	P 4
第5章	遺構について	P 9
第1節	第1号横穴について	P 9
第2節	第2号横穴について	P 12
第3節	第3号横穴について	P 14
第4節	第4号横穴について	P 16
第5節	第5号横穴について	P 20
第6節	第6号横穴について	P 21
第7節	第7号横穴について	P 22
第8節	第8号横穴について	P 24
第9節	第9号横穴について	P 24
第10節	その他の遺構について	P 27
第6章	遺物について	P 29
第1節	第1号横穴出土土器について	P 29
第2節	第2号横穴出土土器について	P 31
第3節	第3号横穴出土土器について	P 34
第4節	第9号横穴出土土器について	P 40
第5節	金属製品について	P 41
第6節	玉類について	P 45
第7節	第1号土坑出土遺物について	P 48
第7章	ま と め	P 49
付 編	玉体横穴群出土人骨について	P 51

# 挿 図 目 次

第1図	大東町と玉体横穴群の位置及び周辺遺跡図	P 2
第2図	玉体横穴群周辺環境図	P 7
第3図	第1号横穴実測図	P 10
第4図	第1号横穴遺物出土状態図	P 11
第5図	第2号横穴実測図	P 13
第6図	第3号横穴実測図	P 15
第7図	第3号横穴遺物出土状態図	P 17
第8図	第4号横穴実測図	P 18
第9図	第5号横穴実測図	P 19
第10図	第7号横穴実測図	P 23
第11図	第8号横穴実測図	P 25
第12図	第9号横穴実測図	P 26
第13図	第1号土壇実測図	P 28
第14図	第1号横穴出土土器実測図	P 30
第15図	第2号横穴出土土器実測図	P 32
第16図	第3号横穴出土土器実測図(1)	P 33
第17図	第3号横穴出土土器実測図(2)	P 35
第18図	第3号横穴出土土器実測図(3)	P 36
第19図	第9号横穴出土土器実測図	P 37
第20図	玉体横穴群出土鉄製品実測図(1)	P 38
第21図	玉体横穴群出土鉄製品実測図(2)	P 39
第22図	第3号横穴出土直刀実測図	P 40
第23図	第3号横穴出土鉄製品実測図	P 42
第24図	玉体横穴群出土鉄製品実測図(3)	P 43
第25図	第1・3号横穴出土玉類実測図	P 44
第26図	第3号横穴出土玉類実測図(1)	P 46
第27図	第3号横穴出土玉類実測図(2)	P 47
第28図	第1号土壇出土遺物実測図	P 48
第1表	玉体横穴群出土人骨計測表	P 52

# 図 版 目 次

巻頭カラー	玉体横穴群遺跡全景（空中撮影）
図版 1 - 1	玉体横穴群 A 調査区調査前遠景（南から望む）
- 2	玉体横穴群 B 調査区調査前遠景（南から望む）
- 3	玉体横穴群 C 調査区調査前遠景（南から望む）
図版 2 - 1	第 1 号横穴調査前状態
- 2	第 1 号横穴遺物出土状態
- 3	第 1 号横穴墓前域状態
- 4	第 1 号横穴完掘状態
- 5	第 1 号横穴完掘状態（空中撮影）
図版 3 - 1	第 2 号横穴遺跡詳細分布調査時確認状態
- 2	第 2 号横穴遺物出土状態
- 3	第 2 号横穴人骨出土状態
- 4	B 調査区発掘作業風景
- 5	第 2 号横穴完掘状態（正面）
- 6	第 2 号横穴完掘状態（上から）
図版 4 - 1	第 3 号横穴封鎖石検出状態
- 2	第 3 号横穴完掘状態
- 3	B 調査区完掘状態遠景（空中撮影）
図版 5 - 1	第 3 号横穴直刀出土状態
- 2	第 3 号横穴遺物出土状態
- 3	B 調査区発掘作業風景（第 7 号横穴検出）
- 4	第 3 号横穴遺物出土状態
- 5	第 7 号横穴周辺発掘作業風景
- 6	第 3 号横穴遺物出土状態
- 7	第 3 号横穴遺物出土状態
図版 6 - 1	第 5 号横穴封鎖石検出状態
- 2	第 5 号横穴完掘状態
- 3	第 5 号横穴右側壁付近ノミ痕状態
- 4	第 5 号横穴左側壁付近ノミ痕状態
- 5	第 5 号横穴奥壁付近ノミ痕状態
- 6	C 調査区完掘状態遠景（空中撮影）
図版 7 - 1	第 7 号横穴検出時確認状態
- 2	第 7 号横穴完掘状態
- 3	第 8 号横穴完掘状態
- 4	第 9 号横穴完掘状態

図版 8 - 1	第 1 号土壇調査前遠景 (東から望む)
- 2	第 1 号土壇調査前近景 (南から望む)
- 3	第 1 号土壇遺跡詳細分布調査時プラン検出状態
- 4	第 1 号土壇遺跡詳細分布調査時プラン検出状態
- 5	第 1 号土壇完掘状態
図版 9	第 1 号横穴出土遺物
図版 1 0	第 2 号横穴出土遺物
図版 1 1	第 2 号横穴出土遺物
	第 3 号横穴出土遺物
図版 1 2	第 3 号横穴出土遺物
- 2 3	有蓋高坏と蓋のセット
- 2 3	有蓋高坏と蓋の合わさった状態
- 2 5	有蓋脚付短頸埴
図版 1 3 - 2 6・2 7	第 3 号横穴出土遺物 (須恵器)
- 2 8～3 5	第 3 号横穴出土遺物 (土師器)
図版 1 4 - 3 6～3 8	第 3 号横穴出土遺物 (土師器)
- 1～3	第 9 号横穴出土遺物
	第 1 号土壇出土遺物
図版 1 5 - 8	第 3 号横穴出土・鏡
- 1・2	第 2 号横穴出土鉄製品
- 3～2 8	第 3 号横穴出土鉄製品
- 6・7	第 7 号横穴出土鉄製品
図版 1 6	第 1 号横穴出土玉類
	第 3 号横穴出土玉類

# 第1章 調査に至る経緯

静岡県は、お茶の産地であるが、大東町の風景も茶畑が一面に広がる茶処である。今までは台地の急斜面に小さな茶畑があり、すべて人力で耕作をおこなっていたが現在では、機械化が進み茶畑も拡大している。そこで、ここ佐東地区に県営農地開発事業として茶園造成が計画された。この事業では、佐東地区を5つの工区に分け、各工区ごとに順次造成工事が実施される計画であった。この事業に伴い埋蔵文化財包蔵地が確認されており、事業主体である静岡県中遠農林事務所及び佐東南土地改良区事務所と再三にわたり、埋蔵文化財の取り扱いに関して協議した。その結果、埋蔵文化財の分布状況・規模などを把握するための遺跡詳細分布調査を国・県の補助金を得て大東町教育委員会が実施し、記録保存のための本調査を中遠農林事務所の負担を得て町教育委員会が実施することとなった。

計画された工区のうち山田工区については、工区内に横穴群が確認されたため、昭和62年度に岩滑清水ケ谷横穴群・岩滑松ケ谷横穴の発掘調査が実施され報告書が刊行されている。

当該横穴群が所在する工区は、近江ケ谷工区と呼ばれ、工区内には静岡県遺跡地名表に「玉体横穴1基」の記載があり、棺座を有すると記されていた。この横穴については、民家のすぐ裏にあり既に開口し、倉庫として使用されていたため、現在では、当時の姿を変えてしまっている。また、玉体横穴の東側、小さく張り出した台地をはさんだ隣の谷に、茶畑の開墾により横穴が発見され玄室内には遺物が確認された。これらの横穴の存在や、一部茶畑により開墾されているものの、台地上にいくつかの小山があり、古墳・その他の遺跡の存在も考えられた。

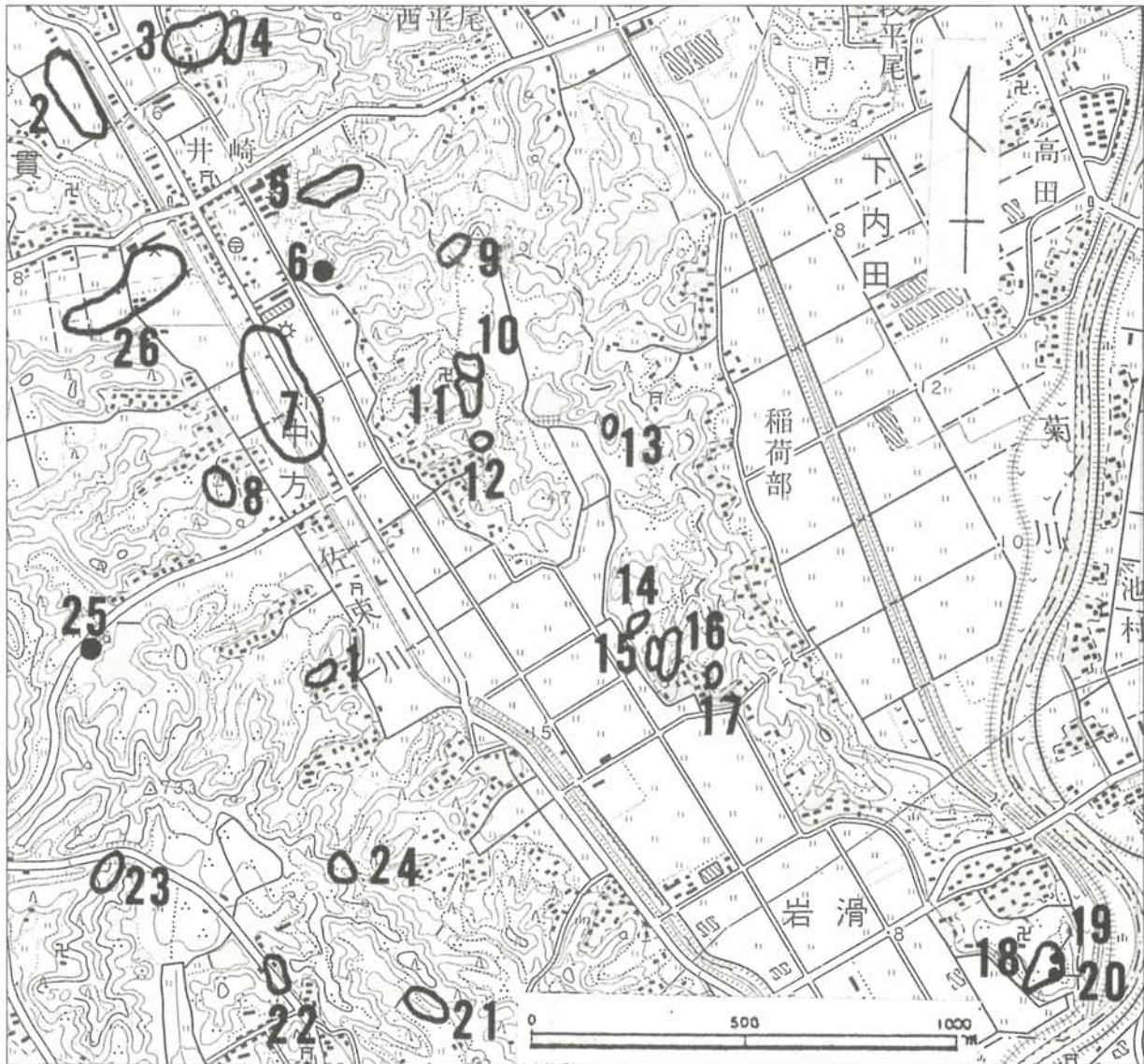
そこで、この近江ケ谷工区について、中遠農林事務所及び佐東南土地改良区事務所と町教育委員会が協議し、昭和63年度に国・県の補助金を得て、工区内の埋蔵文化財を把握するための事前に確認調査を実施した。

その結果、造成工事区域内に6基の横穴と土塚1基を確認し、平成元年度に大東町が中遠農林事務所の委託を受け大東町教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

## 第2章 遺跡の位置と周辺環境

大東町は、小笠山丘陵を北に望み、南は遠州灘に面した南北細長い町である。JR東海道線・東海道新幹線掛川駅から大東町役場までは直線距離にして約12km南に位置している。こうした状況下において、少しずつ大東町にも開発の波が迫ってきている。

当横穴群が存在する佐東地区は大東町の北東部に位置し、掛川駅や東名菊川ICへ至る



第1図大東町と玉体横穴群の位置及び周辺遺跡図

1 玉体横穴群	2 高瀬遺跡	3 天王前遺跡	4 天王谷横穴群
5 鳥見ヶ谷横穴群	6 金比羅山古墳	7 中方遺跡	8 山崎横穴群
9 山田ヶ谷B横穴群	10 山田ヶ谷A横穴群	11 中方B横穴群	12 中方A横穴群
13 松ヶ谷横穴	14 清水ヶ谷横穴群	15 城山遺跡	16 ハツ谷横穴群
17 穴口横穴群	18 青木前遺跡	19 青木前2号墳	20 青木前1号墳
21 猫田横穴群	22 田ヶ谷A横穴群	23 田ヶ谷C横穴群	24 火ヶ峰横穴群
25 丸山古墳	26 中方北遺跡		





交通の要所であり、東側は菊川町に接している。

ここは、小笠山から南東に延びる丘陵の先端部付近であり、多くの横穴群が存在する。

この地域周辺は、古くから横穴群の存在が確認されており、菊川流域の横穴群として知られているところである。その菊川へ注ぐ支流佐東川によって開析された地形が、複雑に入り組み小支谷を形成している。この台地の多くは佐東川に向かって舌状に延びており、その南側斜面にはほとんどの地点で横穴が存在している。

玉体横穴群は佐東川の西側に位置し、北東へ弓なりに張り出した台地の南向き斜面部に開口している。前述のとおり周辺には横穴群が多く、佐東川を狭む対岸に北から順に鳥見ヶ谷横穴群 (No.5)・山田ヶ谷B横穴群 (No.9)・山田ヶ谷A横穴群 (No.10)・中方B横穴群 (No.11)・中方A横穴群 (No.12)・松ヶ谷横穴 (No.13)・清水ヶ谷横穴群 (No.14)・八ツ谷横穴群 (No.16)・穴口横穴群 (No.17)がある。また佐東川右岸、玉体横穴群の北方には山崎横穴群 (No.8)があり、さらに南方には火ヶ峰横穴群 (No.24)・田ヶ谷C横穴群 (No.23)・田ヶ谷A横穴群 (No.22)・猫田横穴群 (No.21)が存在しており、いずれも古墳時代後期に属すると思われるものである。このうち、清水ヶ谷横穴群・松ヶ谷横穴は昭和62年度に、鳥見ヶ谷横穴群は昭和63年度にそれぞれ発掘調査され報告書が刊行されている。

また、付近には金比羅山古墳 (No.6)・青木前1号墳 (No.20)・青木前2号墳 (No.19)・丸山古墳 (No.25)などの高塚墳も存在している。

横穴以外の遺跡では、縄文式土器の散布地である青木前遺跡 (No.18)・弥生式土器の散布地が見られる高瀬遺跡 (No.2)・中方遺跡 (No.7)・中方北遺跡 (No.26)があるが町内全体を見ても、特にこの佐東地区に集中している。古墳時代の遺跡では、高瀬遺跡 (No.2)・天王前遺跡 (No.3)・中方北遺跡 (No.26)・中方遺跡 (No.7)・城山遺跡 (No.15)・青木前遺跡 (No.18)などがある。この地域に多くの横穴が集中していることから、横穴群被葬者層の住居址など、生活の痕跡が存在すると予想されるが、今までにまだ確認されていない。

### 第3章 確認調査

玉体横穴群発掘調査に先立ち、昭和63年度に未確認の横穴の存在や、その他の遺跡の有無及び規模を把握することを目的とした遺跡詳細分布調査を実施した。近江ヶ谷工区については、佐東地区の中方地域と下土方地区にまたがっており、ここを2ヶ年度に分け、1年目に佐東地区、2年目に下土方地区を造成するという計画であった。そこでまず、平成元年度より造成工事に入る中方地区から事前の調査をおこなうこととなった。

調査は、平成元年2月26日から3月17日まで、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、国・県の補助金を得て実施した。まず区域内の踏査をおこない、埋蔵文化財の存在が予想される地点にトレンチを設定することにした。この区域は、大半が急傾斜の台地でその多くが山林であったため踏査は困難であったが、台地頂上及び尾根上または南向きや東向き斜面はすべて踏査した。ここに、古墳その他の遺跡などの存在が考えられる台地上の11ヶ所にトレンチを設定した。

その結果、遺物の散布及びトレンチからの検出は全く見られなかったが、横穴と思われる小

さな穴が2ヶ所みつきり、周辺の表土を剥離して横穴の存在を確認した。横穴群は、佐東川に向かって、北東へ弓なりに張り出した台地南側斜面部のみに構成されていた。これらは、既に開口し倉庫として使用されていたものも含めて6基の横穴が確認された。また、玉体横穴群の存在する台地より南西側に位置し、東へ延びる台地の付け根付近に標高約30mのお椀を伏せたような山があり、頂上には「行者之墓」の墓銘のある墓石が確認された。この墓石は大正時代に建てられたもので、土地所有者が古くからの言い伝えより建立したとのことであった。ここは墳丘の様相を示しており、古墳の存在が考えられるため、墓石の中心に十字形にトレンチを設定して調査した。その結果、円形のプランが検出され土塚を確認した。

## 第4章 調査の方法と経過

調査は、平成元年6月28日から10月8日までの間におこなった。調査では、最も東側に確認された横穴から順番に、第1号横穴・第2号横穴・・・・・・・・・・と呼称し、また、「行者之墓」墓銘の下で確認された土塚を第1号土塚と命名した。

調査の順序として工事の関係から第1号横穴より始める考えであったが、各横穴の崖下に家屋があり排土処理が困難であり、とくに第1号横穴は急直下に家屋があるため、ここは工事直前に調査することにして比較的調査の容易な第4号・第5号横穴から開始した。

しかし、ここも開口部からはわずかに平坦地があるだけで同様に急直下の崖があり、崖下には家屋があった。そこで、2つの横穴の西側に表土等を裏山へ排土するための道を重機でつくることになったが、その前にその地点の横穴の有無を確認するために表土剥離作業をおこなった。結局これは、すべて人力で裏山の尾根を越えて排土しなければならなかったため、時間を浪費した。同様に、第2号横穴と第3号横穴の間にも、排土道作成のための確認作業をすべて人力でおこなった。ここで、第2号・第3号横穴のほぼ中間付近に新たに横穴が発見されたため、第7号横穴と命名した。

その後、重機で第3号横穴と第7号横穴の間及び第4・5号横穴の西側に排土道の切り通しを作成した。また、調査が進むうちに、第1号横穴も調査可能となり、同様に当横穴の西側に重機により切り通しを作成し、排土道とした。また、第3号横穴からは、北東へ約9.5mの地点に第8号横穴、第7号横穴の東隣に第9号横穴がそれぞれ発見された。

そこで、地形からも本横穴群が大きく3つに分けられるため、第1号横穴をA区、第2号・3号・7号・8号・9号横穴をB区、第4号・5号・6号横穴をC区として設定し、また、その他の遺構として第1号土塚をD区と設定した。

調査期間中は、雨天が多く台風の上陸にあい、調査の中断が多かった。また、急斜面中に構築された横穴は、土砂崩れの恐れがあり、さらに遺構の保護のため、1日の調査終了時にはビニールシートで覆っていたが、風雨によりシートがめくれ、または裂けてしまい雨水が内部に流入するなど、これらの処理に多くの時間を費やしてしまった。

遺構実測図は1/10を原則として作成し、写真は6×7判と35mm判カメラで、カラー・白黒・カラースライドを用いた。

尚、地形測量は業者に委託し基準点等を設置した。

調査の経過についての概略は以下のとおりである。

6月28日	地形測量・用具搬入・表土剥離作業
6月29日	第4・5号横穴墓前域発掘・第7号横穴検出
7月11日	重機にて切り通し作成
7月21日	第8号横穴検出
7月27日	第4号横穴実測
8月2日	第2・3号横穴発掘
8月4日	第7号横穴実測・第9号横穴検出
8月11日	第1号横穴重機にて切り通し作成
8月16日	第1号横穴発掘・第3号横穴鏡出土
8月17日	第7・9号横穴墓前域発掘
8月21日	第1号土坑完掘撮影・第1号横穴遺物写真撮影
8月23日	第5号横穴封鎖石実測
8月24日	お払い・第1号横穴出土状況図実測
8月25日	第3号横穴出土状況図実測・第2号横穴遺物上げ
8月29日	第8号横穴実測
8月30日	第5号横穴内発掘
9月11日	第3号横穴封鎖石実測
9月16日	第2号横穴遺物出土状況図実測
9月17日	第8号横穴実測
9月18日	第1号横穴実測
9月22日	第2号横穴遺物上げ、実測
9月23日	第3号横穴遺物上げ、実測・第5号横穴実測
9月26日	全測図実測
10月6日	空中写真撮影
10月8日	終了





第 2 图 玉体横穴群周边环境图

第 2 图 玉体横穴群周边环境图

# 第5章 遺構について

## 第1節 第1号横穴について

### ●調査前の状況

最も東側に位置する横穴で、最も規模の小さいものである。遺跡詳細分布調査時の踏査において、斜面にわずかにほみが確認され、完全に表土に覆われていた。内部は若干空洞があったが、かなりの土砂が流入していた。表土剥離作業の中でも、封鎖石や遺物などは検出されず、明確な墓前域も確認できなかった。

### ●玄室・羨道部

本横穴は主軸方向をN-29°-Wにとる。玄室の平面形は、ほぼ隅丸方形に近い形を呈し、床面での玄室長は1.58m最大幅は2.12mの規模である。横断面形は蒲鉾形を呈し、壁面と天井部の境界は不明瞭である。天井部の最大高は1.08mを測りドーム形を呈する。

奥壁付近の海拔レベルは30.5mで、床面は8°で傾斜し、玄門部付近のレベルは30.28mである。床面には、玄室中央を中心に小礫による礫床が1.5cm～4.0cmの厚さで施されている。また、壁面に沿ってほぼ1周する排水溝が設けられ、玄門部で合流する。

羨道部は長さ0.6mを測り、天井部は落盤している。さきの合流した排水溝は主軸方向に延び、幅14cm～20cm、深さ3cm～8cmの規模で西へカーブしながら設けられている。

この溝には、羨道部から墓前域にかけて暗渠排水のため平面長円形の河原石で蓋をされていた。

### ●工具痕の観察

全体的に剥落が多く不明瞭であるが、玄室右半奥壁付近に径0.7cmのツルハシ状工具痕が観察された。また、幅2.7cmの手斧痕が天井部付近に見られ、玄室右側壁付近に幅7.7cmの鋏先と思われる仕上げ用の痕跡が観察された。

### ●墓前域

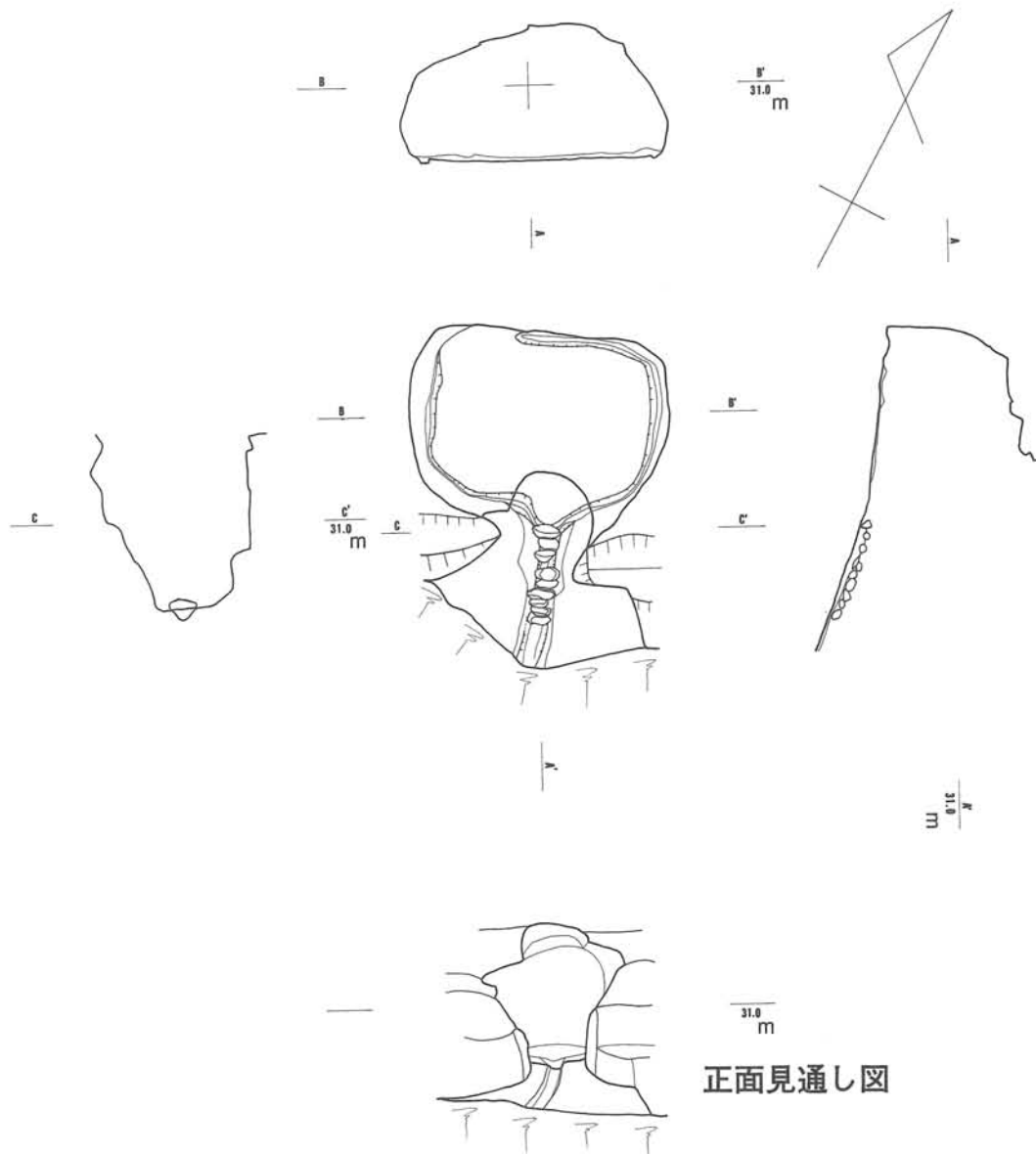
墓前域については、崖下が迫ってきており、ほとんど残存していない。わずかに左側壁がテラス状に段を有しており、排水溝が西へカーブしていることから、墓道は西側から通じていた可能性がある。

### ●封鎖部

本横穴の封鎖施設は残存していなかった。

### ●出土遺物

本横穴からは第4図に示したように須恵器6点・土師器2点がほぼ完形で出土した。須恵器では坏蓋1点・坏身3点・甕1点・甕1点が完形で、破片の接合により提瓶1点が出土した。土師器では把手付鉢1点・甕1点が完形で出土した。須恵器甕のみ、やや玄室中央付近から出土している。図で示したとおり、完形遺物は玄室右側壁に沿って、横転した状態で礫床の上から出土した。また、その他に、土器片・人骨片や水洗選別によって玉類が出土した。

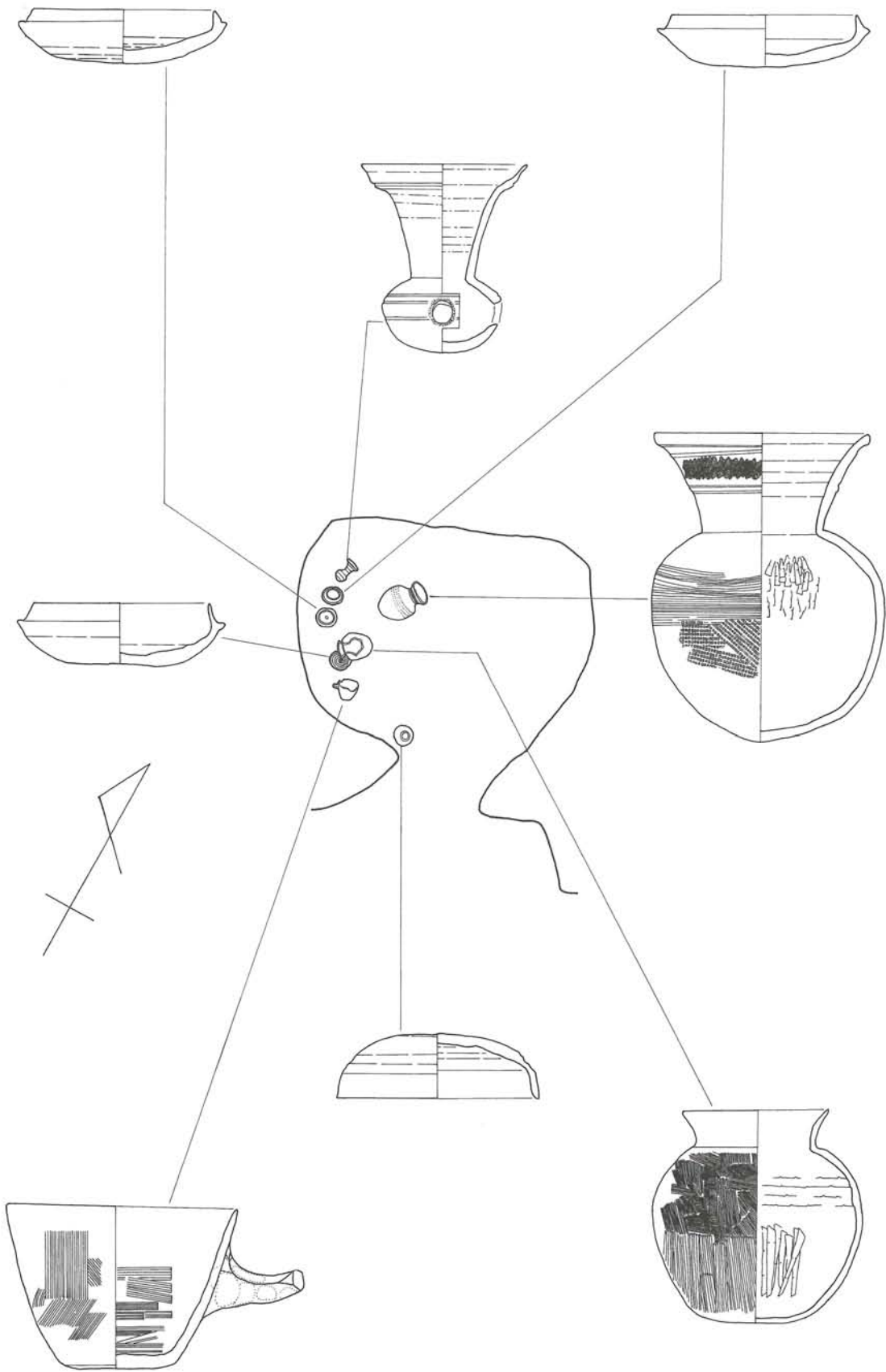


正面見通し図

礫床範囲図



第3図 第1号横穴実測図



第4図 第1号横穴遺物出土状態図



## 第2節 第2号横穴について

### ●調査前の状況

本横穴は茶畑の開墾により天井部が削平され、玄室内は完全に埋まっていた。

### ●玄室・羨道部

本横穴の主軸方向はN-18°-Wを指す。玄室の平面形は、隅丸方形を呈し、床面で玄室長3.74m、最大幅2.32mを測る。横断面形は残存部では蒲鉾形を呈し、最大高は残存部で2.08mを測り、壁面と天井部との境は不明瞭である。

床面には、玄室右半部の奥壁付近に主軸と直交する方向に2基分、玄室左半部に主軸と平行する方向に1基分の組合せ式箱式石棺の溝が検出された。従って埋葬にあたっては、箱式棺が用いられると判断される。また、棺の設置に伴う玄室の改変が平面形で観察され①玄室左半部の主軸と平行方向の箱式棺→②玄室右半部の主軸と直交方向で奥壁側の箱式棺→③玄室右半部の主軸と直交方向で開口側の箱式棺の順で設置され、さらに7体の人骨出土から、先行埋葬があったと考えられる。

玄室床面の奥壁付近海拔レベルは27.34mで玄門部との比高差は24cmを測り、緩い傾斜で下る。

羨道部は、長さ1.6m、最大幅1.14mを測り、墓前域に至るところで急激に落ち込んでいる。また、天井部は崩落している。

### ●工具痕の観察

天井部及び壁面の崩落は激しく、また残存部分についても、調整が丁寧なのか、雨水等の浸透による浸食のためか、壁面が滑らかになっており痕跡を観察することができない。

### ●墓前域

茶畑の開墾により削平されて残存していない。

### ●封鎖部

本横穴の封鎖施設は残存していなかった。

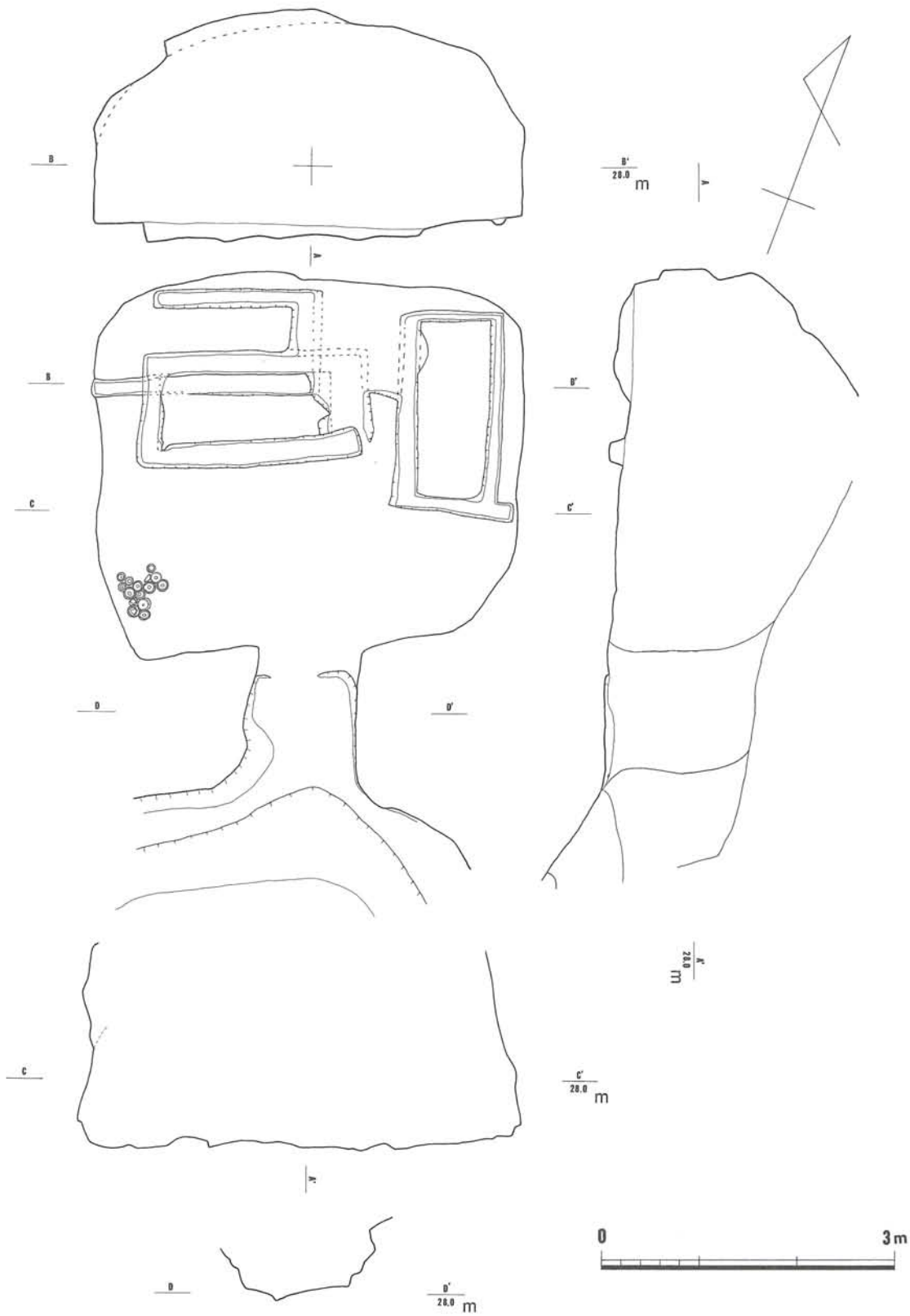
### ●出土遺物

本横穴からは多くの遺物が出土しているが、土器類は破片が多い。本横穴からは、須恵器33点・土師器12点・灰釉陶器5点・鉄製品2点が出土した。

特に、玄室右半玄門部付近に須恵器坏蓋7点・坏身9点・土師器坏3点が一括して出土している。この一括遺物は床直からの出土である。また、山茶碗・灰釉陶器などは玄室内に散在して出土し、さらに破片が多く、床面よりかなり浮いた位置から出土した。これら出土遺物は、数年代の遺物が混在しており、灰釉陶器などの出土からも再利用されていると考えられる。

また、人骨も多量に出土しているが、奥壁を中心に散在しており、頭骨と下顎が離れて出土していることから、再利用あるいはその後の盗掘により振り分けられたものと考えられる。

尚、人骨については、国立科学博物館人類学部長 山口 敏先生に鑑定していただき、玉稿を賜っており、詳細は付編を参照されたい。



第5图 第2号横穴实测图

### 第3節 第3号横穴について

#### ●調査前の状況

開墾により発見されたが、土地所有者が手を付けずそのまま放置されていた。羨門部の半分近くまでは、表土に覆われていた状態で、そこから上は、地山が露出していた。また、玄室内には土砂が堆積していたが、内部の状況が観察でき、完形の土師器・須恵器が数点確認できた。

#### ●玄室・羨道部

本横穴の主軸方向はN-87.5°-Wを指す。玄室の平面形は円形を呈し、床面で玄室長2.48m、最大幅2.8mを測る。横断面形は蒲鉾形を呈し、壁面と天井部の境は不明瞭である。天井部の最大高は1.34mを測り、ドーム形を呈する。玄室床面には小礫による礫床が施されている。また、床面には玄門部付近に排水溝と思われる段が有る。これは、開口部側から奥壁に向かって、三方に広がる形であり、左右二方向は側壁に沿い、中央方向は主軸線上に奥壁へ向かっている。しかし、中央方向の段は検出時には溝状というよりは単なる段の様相であり、明確に溝と判断できない面もある。あるいは、溝が剥落して丸くなったとも考えられる。床面は平坦であり、開口部と奥壁付近の比高差は少なく、開口部付近のレベルは海拔30.38mで奥壁付近は30.48mである。

羨道部は、長さ0.6m、最大幅0.7mを測り、天井部は崩落しており、床面はほぼ平坦である。

#### ●工具痕の観察

奥壁付近及び玄室右側壁面にやや不明瞭であるが、径約0.8cmのツルハシ状工具の痕跡が観察できる。これは荒掘り用と思われるが、規則性は不明である。また、幅約5cmの曲刃をした手斧痕が天井部から放射状に施されている。これは細かく調整されており、ウロコ状に痕跡が残る。これらの工具痕を観察すると振り降して、向かって右側の痕跡を左側のそれが切っているもので、順序は右から左へ移るように調整されている。

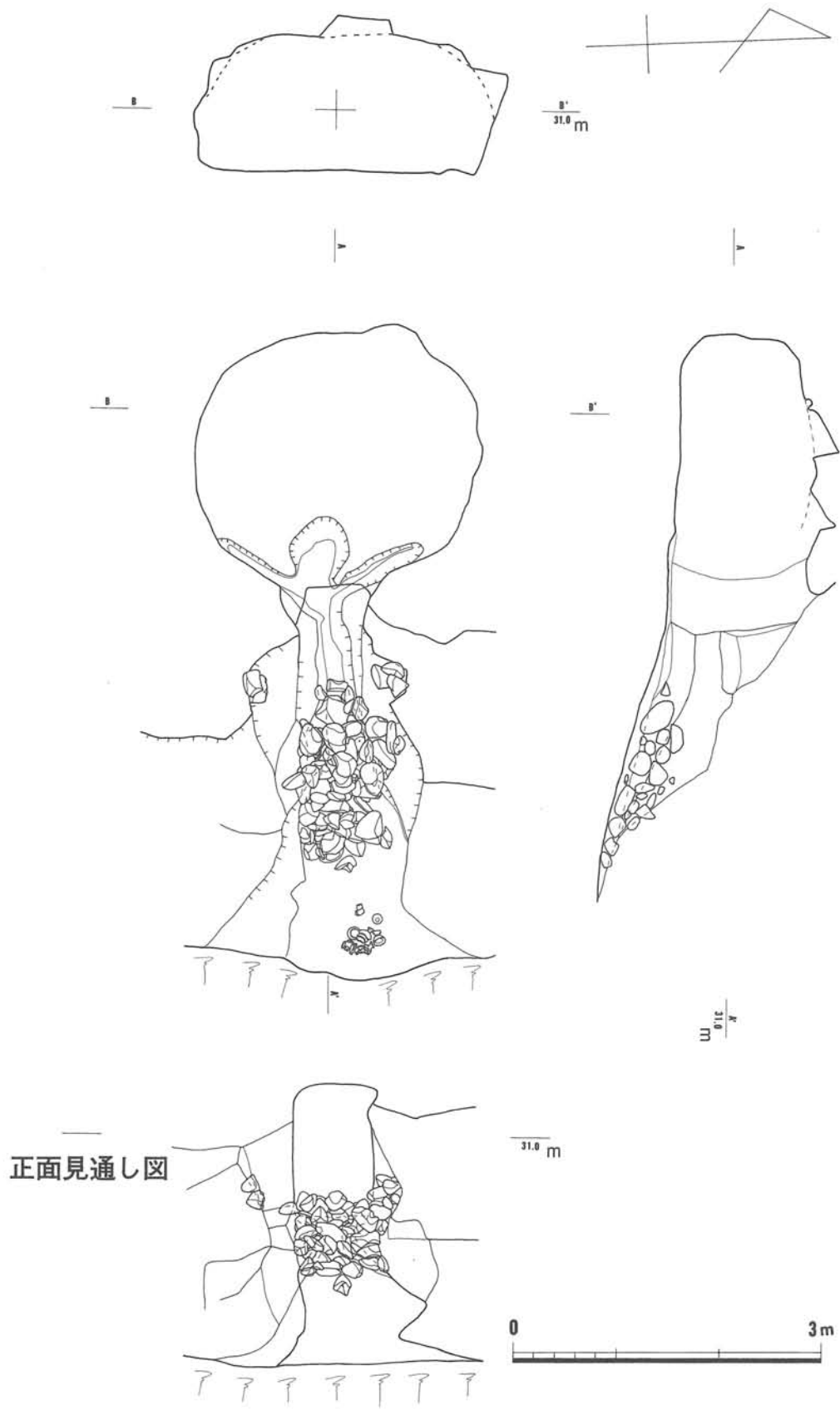
#### ●墓前域

本横穴の墓前域は前端部を茶畑の開墾により削平されている。羨門部から、ほぼ直線的に延び、残存長3.0m、最大幅1.6mを測る。左右両側壁には、テラス状の段を持ち、とくに羨門部には左右対象に同じ規模のテラスを有している。

墓道は幅60cmで進むが、前端部に近づくとやや幅を広げ、若干北へカーブする様相を呈す。現存する墓前域の中間付近に封鎖に使用されたとされる河原石が検出されたが、盗掘の際に、墓前域に出されたものと思われる。また、奥壁から6.02mの地点の主軸線に左側墓道に墓前祭がおこなわれたと思われる土器群が出土した。しかし、床直より約10～20cm浮いており、盗掘時に出されたものとも考えられる。

#### ●封鎖部

前述のとおり、平面長円形をした円礫の河原石による封鎖石が検出されたが、墓前域中間付近より出土したもので、原位置を保っているとは考えられない。羨門部周辺からは床直地点においても全く封鎖石が検出されない。



第6図 第3号横穴実測図

## ●出土遺物

本横穴は当該横穴群の中で最も多量の遺物が出土した横穴である。

出土土器は須恵器では有蓋高坏蓋6点・蓋坏6点・坏身8点・無蓋高坏1点・有蓋高坏6点・長脚一段一方透し付無蓋高坏1点・短頸埴1点・有蓋脚付短頸埴1点・甕1点・広口甕1点が出土し、土師器では高坏が15点出土した。また、接合不能器種不明土器片が多量に出土している。これらの遺物は玄室内全体に散らばって出土しているが、玄門部寄りの玄室右側壁周辺に比較的まとまっているものと、玄室のほぼ中央から主軸に直交する方向で、玄室左半部に向かって並べられた状態のものと大きく2つに分けられる。この玄門部寄りの玄室右側壁周辺の遺物は床面より若干浮いた遺物もあり、土器と土器が折り重なっており、片付けられた状態と思われる。また、玄室のほぼ中央から主軸と直交方向に玄室左半部に向かって並べられた状態のものは、比較的整然と並べられており、その奥壁側に鏡・直刀などが出土している。これら出土土器の一部の出土状態を第7図に示した。

鉄製品は、鏡1点・直刀2振のほかに刀子2点・鉄鏃16点・帯金具3点が出土した。また、棒状のものや錆化が激しく形状の不明なものが水洗選別などにより出土している。玉類は勾玉1点・管玉22点・切子玉3点・棗玉17点・丸玉63点・小玉72点が出土した。これらは主に水洗選別によって得られた資料で多く占めるが、それらのほとんどが玄室左半部から検出された。

## 第4節 第4号横穴について

### ●調査前の状況

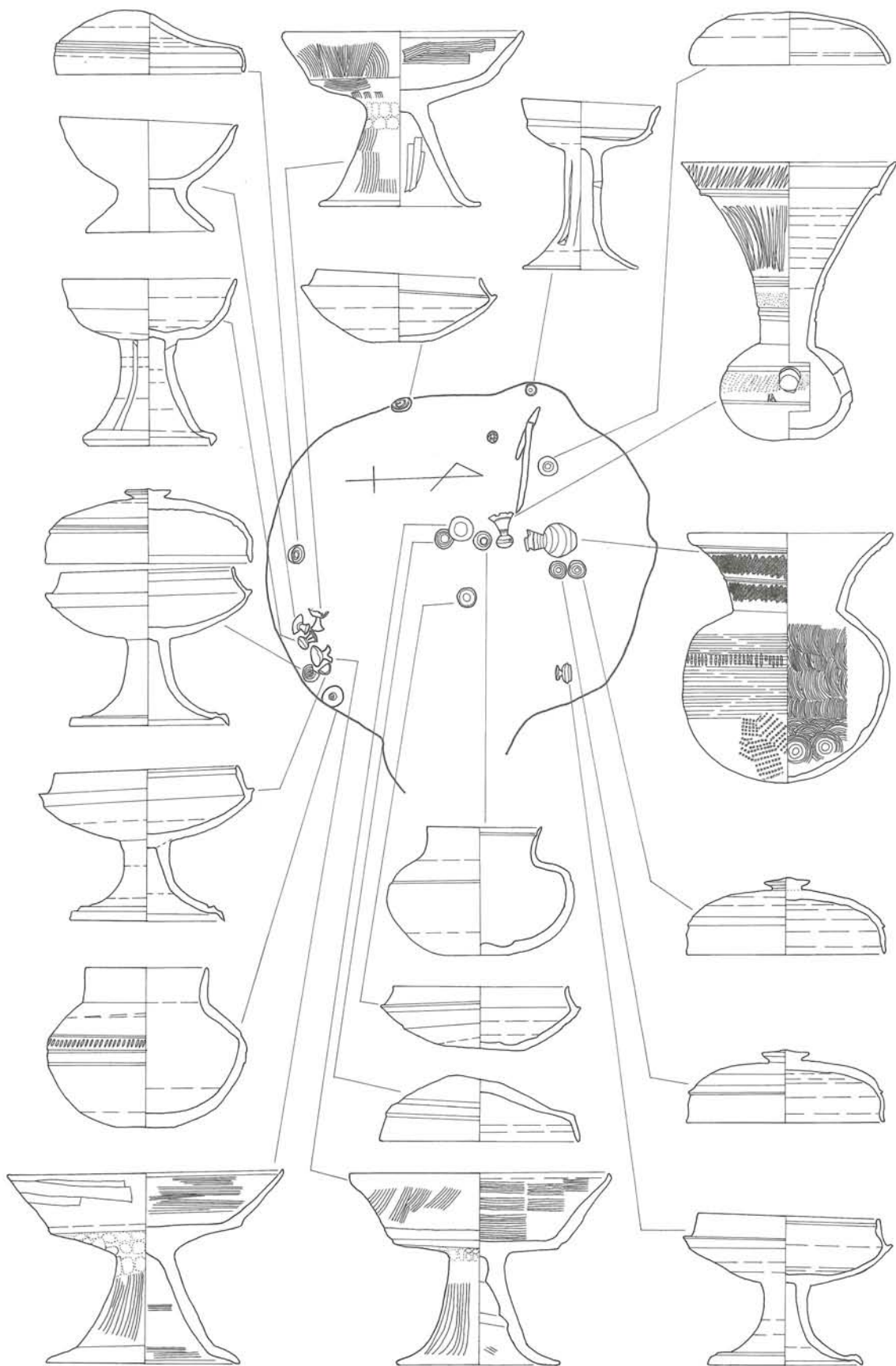
当該横穴群の中でも比較的高レベルに位置する横穴であるが、既に開口しており、民家の倉庫として利用されており、内部も後世に拡張を受けている。

### ●玄室・羨道部

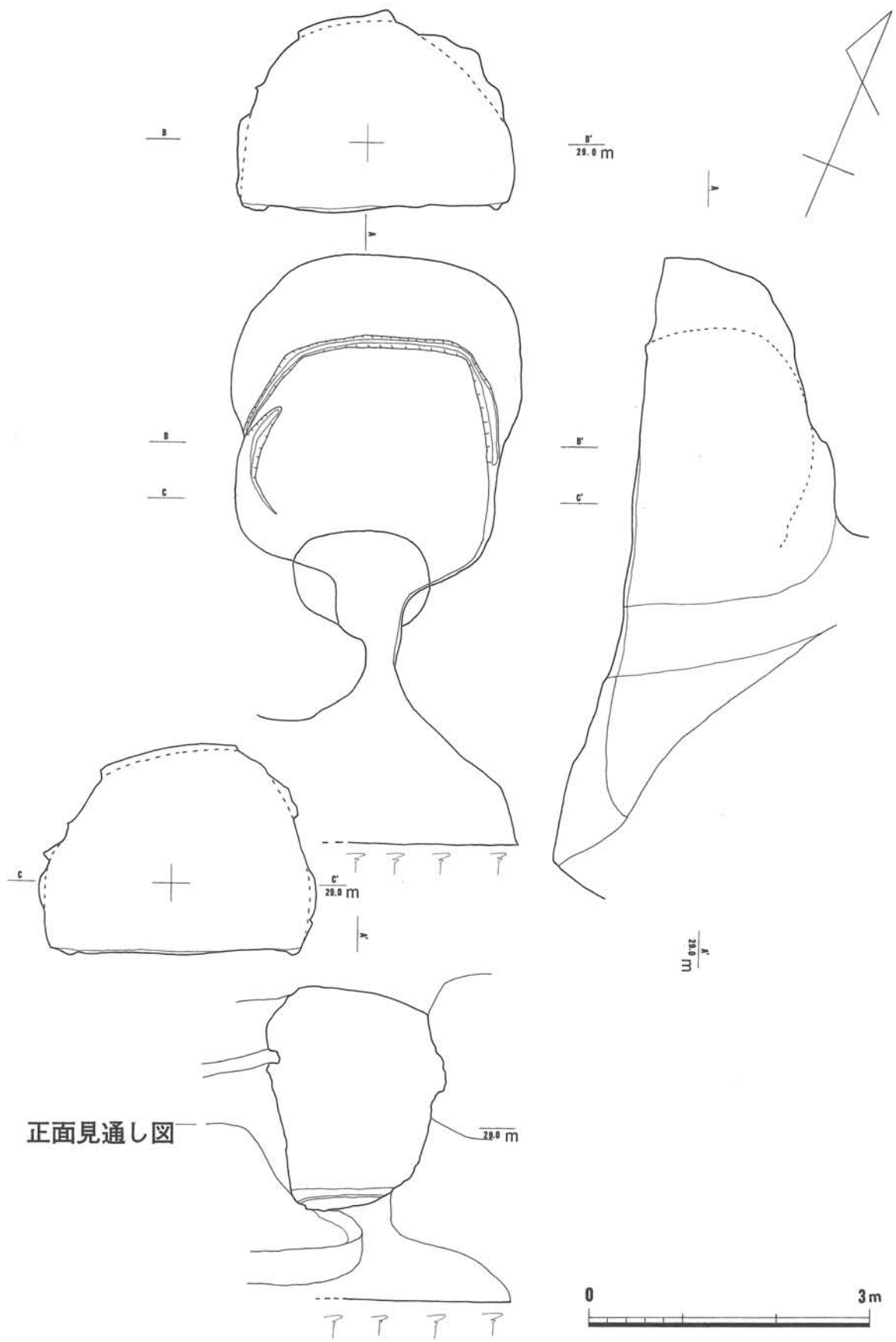
本横穴の主軸方向はN-26°-Wを指す。玄室の平面形は円を呈し、床面での残存玄室長2.64m、現最大幅2.84mを測る。横断面形は蒲鉾形を呈し、現最大高1.76mを測り、壁面と天井部の境は不明瞭である。しかし、前述のとおり倉庫使用のため後世の手で拡張されており、実測数値については不明確であり、現在の状況を表した。

床面を観察すると、奥壁と両側壁に沿って円弧状に排水溝の存在が認められる。これは側壁の中間で消滅している。また、右側壁には、先の排水溝とつながらない溝があり、これが本来の排水溝でその奥壁側立ち上がり部分からが、本来の玄室の壁面線ではないかと思われるが、この時点では判断がつかない。従って、この排水溝より奥が拡張された部分である。調査時点での開口レベルは海拔28.16mで奥壁付近は28.38mであり、なだらかに傾斜している。

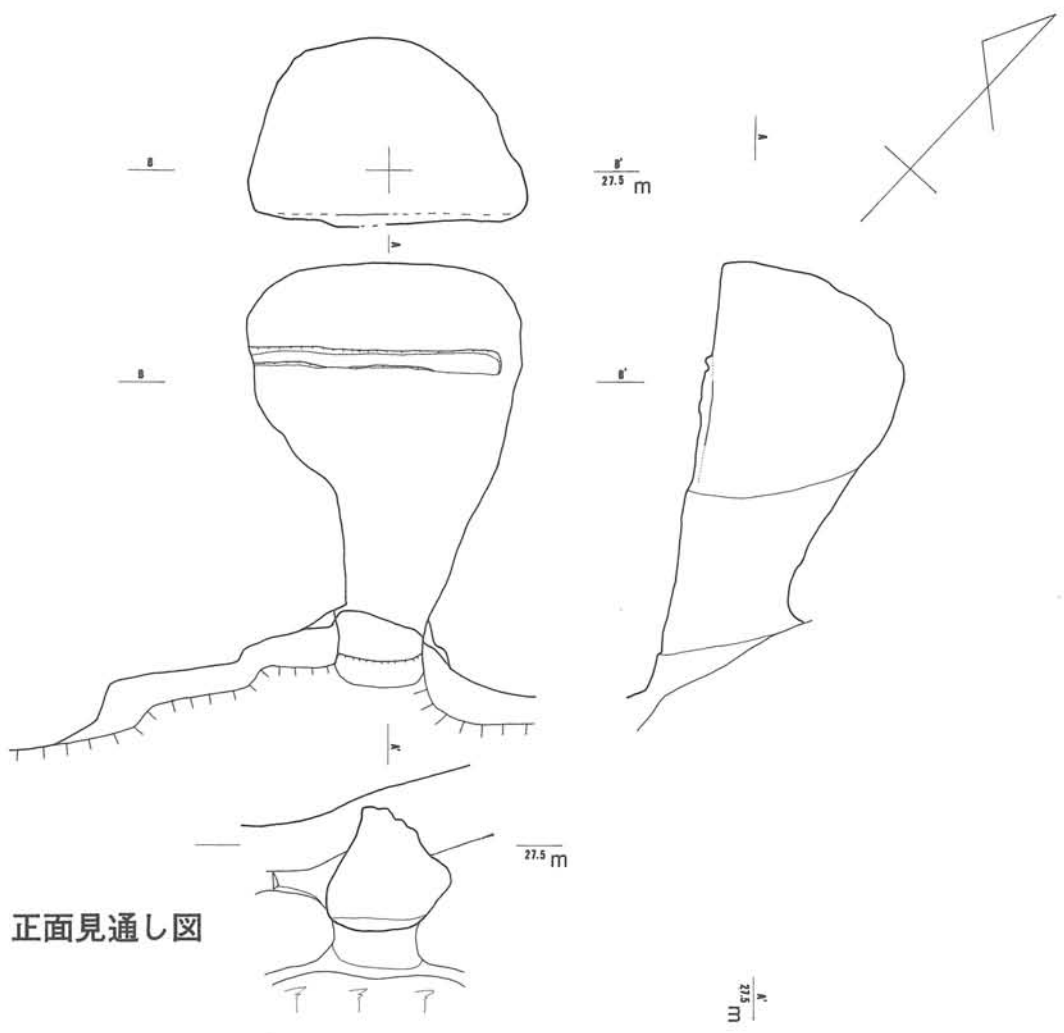
羨道部も崩落が激しく、床面も掘り込められているようだが、長さ1.0m、最大幅0.4mを測り、天井部は崩落している。



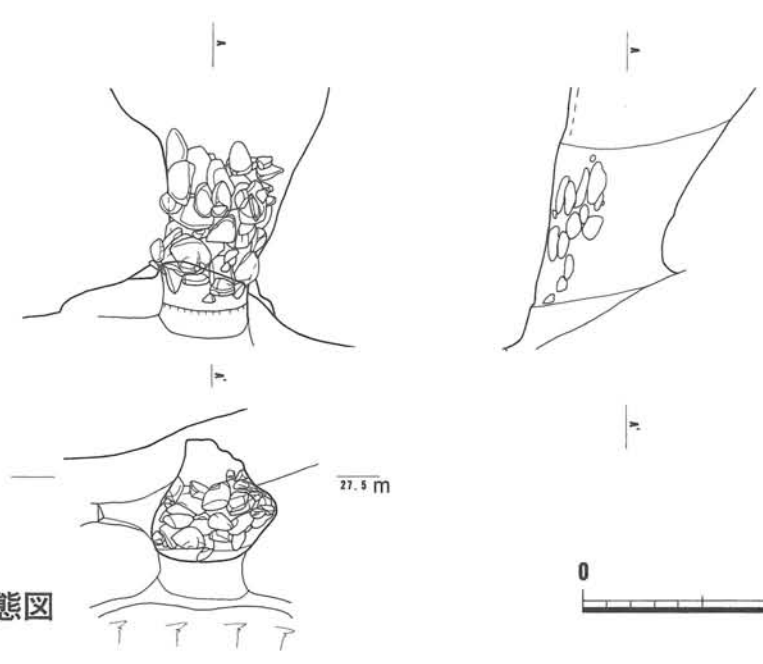
第7图 第3号横穴遺物出土状态图



第8図 第4号横穴実測図



正面見通し図



封鎖状態図



第9図 第5号横穴実測図



### ●工具痕の観察

崩落及び拡張がおこなわれており、ほとんど観察不可能であるが、仕上げ用として幅5cmの鋏先が使用されているようである。

### ●墓前域

本横穴も垂直する崖の際にあり、前端部を欠くが残存長で1.8mを測る。羨門部から八の字状に広がる、左辺は徐々に主軸線に平行になり、また右辺は主軸線に対し直角に延びる。床面では羨門部から傾斜し、奥壁4.3mの付近でさらに急傾斜となる。尚、墓道は確認できなかった。

### ●封鎖部

本横穴は既に開口し倉庫として使用されていたため、封鎖施設は検出されなかった。

### ●出土遺物

本横穴からの出土遺物はない。

## 第5節 第5号横穴について

### ●調査前の状況

本横穴は、第4号横穴の西側に隣接しており、遺跡詳細分布調査で新たに発見されたものであり、全て表土に覆われていた。

### ●玄室・羨道部

本横穴の主軸はN-42°-Wを指す。本横穴の玄室左側壁は、開口部まで屈曲せず、ほぼ直線的であるが玄室右側壁は、玄室平面形でやや円形を呈し、玄門部で屈曲し、羨門部と玄室が区別できる。また、奥壁もほぼ直線的である。

床面での玄室長1.9m、最大幅は奥壁付近であり2.3m、玄門部1.34mを測る。横断面形は蒲鉾形を呈し、最大高1.66mを測り、壁面と天井部の境は不明確である。

床面には、主軸線に直交する一直線の溝がある。右側壁から左側壁へ延びるが、側壁まで達せず消滅している。また、この溝から開口部に向かって地山層を板状ブロックに加工した貼り床が施されていた痕跡があった。しかし、奥壁から溝までは貼り床の痕跡がなくまた、この部分のレベルが若干高くなり、平坦に加工されていることから、棺台である可能性がある。

奥壁と開口部との比高差は30cmで比較的急斜面である。奥壁付近の海拔レベルは27.22mである。

さきに述べたように、側壁の状態が違うことから本横穴は改変されている考えられる。右側壁玄門部の屈曲部に一致して床面段差が設けられている。従って対辺にも屈曲部があったと考えられる。このことから、本来の横穴は長円形に近い玄室平面形をもち、これに羨道が接続していた形態が横穴であり、これが貼り床を設ける際に左側壁に棺を近接して置く必要から、そこを直線的に改変したと想像される。

羨道部は先の状況から判断すると、当横穴群の中では特筆して長い羨道を持ち、規模は長さ1.38m、羨門部幅0.7m、最大高1.3mを測る。床面は、玄室から不明瞭な段差で区切り、玄室とほぼ同角度で傾斜し、開口部から屈曲して急激に下る。

### ●工具痕の観察

本横穴は残存状態が良く、工具痕も比較的明瞭に観察することができた。荒掘り用として径 0.7 cm程のツルハシ状工具痕が奥壁を中心にして比較的広範囲に観察できる。また、中掘り用と思われる幅 4.6cm程の曲刃をした手斧痕が見られた。

### ●墓前域

本横穴の墓前域は第 4号横穴の墓前域と共用しており、同様に前端部を欠く。残存長で 0.86 mを測り、開口部から大きく広がる。床面は、開口部から急斜面となり平坦部分は残長していない。

### ●封鎖部

断面長円形の河原石を中心に小口積みを基本として積まれている封鎖石が検出された。封鎖石を積んだ後、前面に粘土質の黄褐色土を貼りつけているようである。また、封鎖石は、羨道部のほぼ全面に積まれている。

### ●出土遺物

本横穴からの玄室内に若干堆積していた土の水洗選別によって得られた鉄製品のみである。鉄製品は鉄鏃 5点と棒状の不明品 11点である。

## 第 6 節 第 6 号横穴について

### ●調査前の状況

本横穴は、静岡県遺跡地名表に「玉体横穴 1 基・棺座を有する」と示されていたものである。これは、民家の敷地内に存在しており、家屋の裏側にあるため、当家の人々が倉庫として使用するために、拡張してしまっている。そのため、遺構としての残存状態は極めて悪く、全く形状を変えてしまっている。

### ●玄室・羨道部

前述のとおり状況のため、主軸方向及び玄室等の規模は不明である。

### ●工具痕の観察

現代のツルハシの痕跡が全面に残り全く形状が変わっている事が確認できる程である。

### ●墓前域

本横穴の現在の開口レベルは海拔 18.0m で民家敷地のレベルが 17.6m である。建物を建築する段階で墓前域を削平しているようである。

## 第7節 第7号横穴について

### ●調査前の状況

本横穴は、事前の調査では茶畑の中に埋まっていて、確認できず本調査の途中で発見された。土地所有者の話によると以前倉庫として使用したことがあったということである。茶畑の開墾のため、玄室内に故意に土砂を入れ、完全に埋められていた。

### ●玄室・羨道部

本横穴の主軸はN-51°-Wを指す。玄室の平面形は隅丸方形を呈し、床面での、玄室長3.06m、最大幅3.4mの規模である。横断面形は蒲鉾形を呈し、壁面と天井部の境界は不明瞭である。天井部は崩落が激しいが最大高2.04mを測り、ドーム形を呈する。奥壁付近の海拔は26.76mで緩やかに傾斜し、開口部では比高差が22cmである。床面には、玄室左部に主軸方向に平行する組合せ式箱式石棺が検出された。

また、奥壁付近に主軸と直交方向に棺の溝と思われる溝が3条検出され、これは前述の石棺に切られている。このことから、再利用されていると考えられる。

尚、玄室の中心線と羨道部の中心線がずれており、さらに玄室平面形で左側壁が大きく膨らんでいることから、石棺が設置された時に玄室左側壁を拡張する改変がおこなわれたと判断される。

羨道部は大きく落盤しており、羨道左側壁は消失している。さらに、天井部も崩落している。残存長で1.2m、推定幅0.8mの規模である。

### ●工具痕の観察

本横穴は開口部周辺が削平され、倉庫として使用されていた時期があることから明瞭な工具痕は残っていない。しかし、玄室右側奥壁付近に若干の工具痕が観察できた。荒掘りに使用されたと思われる。工具痕で長径1.4cm、短径0.5cm、の断面長方形の曲刃痕が見られる。また、これとは別のツルハシ痕も見られたが、倉庫使用時のものと思われる。さらに、残存状態は悪いが仕上げ用として幅7.7cmの曲刃した平状工具痕が観察できた。これらは、すべて不明瞭であり方向性など不明である。

### ●墓前域

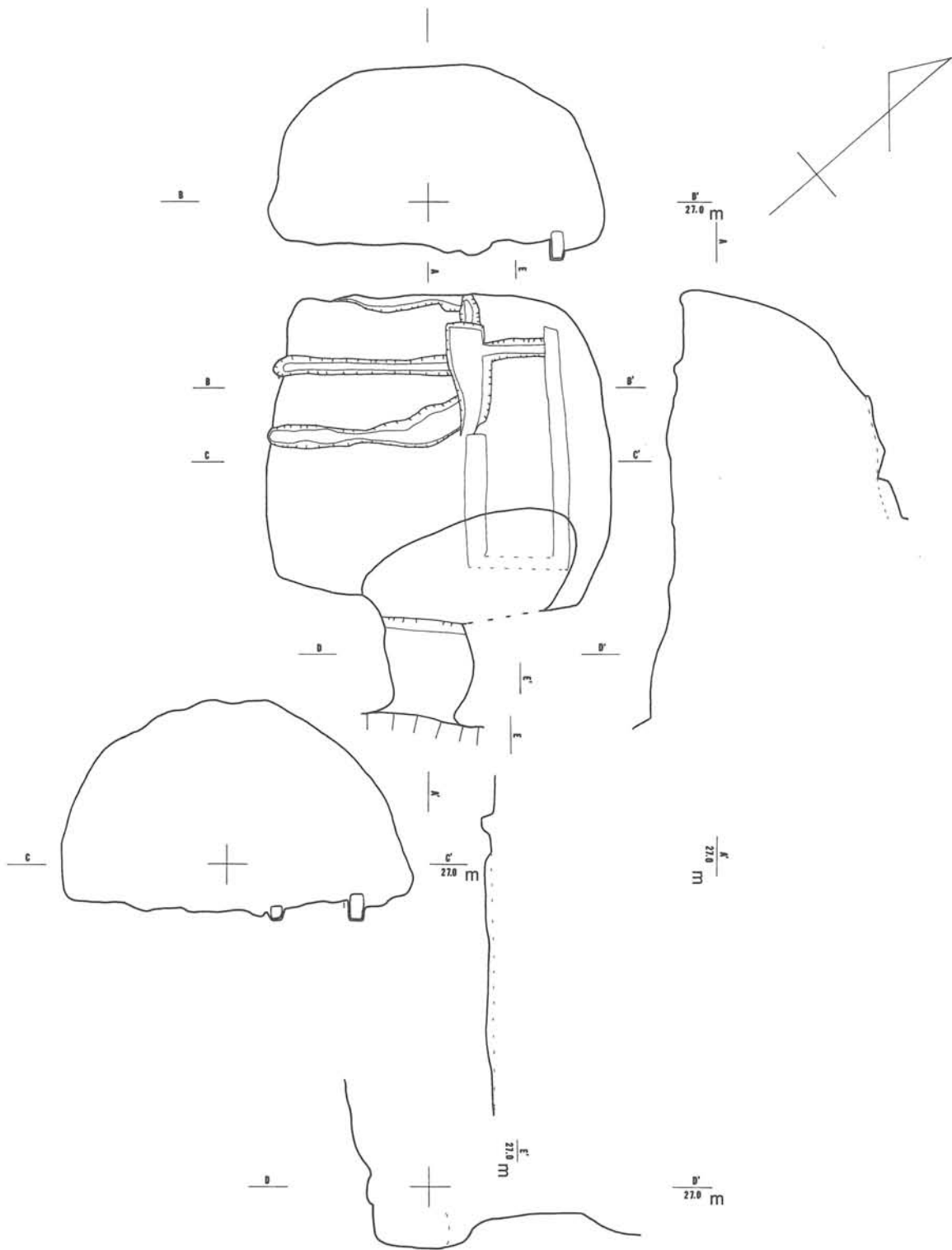
本横穴の墓前域は茶畑の開墾により削平され、残存していない。

### ●封鎖部

本横穴は羨道左側側壁が残存しておらず羨道床面からも封鎖施設は検出されなかった。

### ●出土遺物

本横穴からの出土遺物は水洗選別によって得られた鉄製品のみである。これは馬具の引手壺の軸部分である。



第10图 第7号横穴实测图

## 第8節 第8号横穴について

### ●調査前の状況

本横穴も、茶畑の中に埋まっており、事前調査では確認することができず、本調査途中で発見された。本横穴は当横穴群の中でも比較的低いレベルに開口している。

### ●玄室・羨道部

本横穴の主軸はN-70°-Wを指す。玄室の平面形はフラスコ形を呈し、床面での玄室長3.04 m、最大幅3.5 mの規模である。横断面形は蒲鉾形を呈し、壁面と天井部の境界は不明瞭である。天井部の最大高は1.67 mを測り、ドーム形を呈する。壁面は、玄室床面からも大きく膨らんで立ち上がる。

玄室床面には、段差が階段状にあり開口部へ向かってやや傾斜しながら下っていき、奥壁付近の海拔レベル26.02 mで開口部との比高差は24 cmである。

羨道部は長さ1.1 m、開口部での幅1.1 mで幅を減じていく。天井部は落盤して残存していない。床面には、階段状に段差が四段ある。

### ●工具痕の観察

本横穴の工具痕は、不明瞭であるが径7 mm程のツルハシ状工具痕が天井部から側壁付近にかけて観察された。これは荒掘り用として使用されたと思われる。また、中掘り用として幅1.5 cm、厚さ5 mmの曲刃の手斧痕が見られる。これは、ほぼ全面に痕跡があり、天井付近から側面には調整のように使用し、床面から60 cm程のところから下は荒掘りとして使用しているとかんがえる。さらに調整に使用されたと思われる幅8.7 cmの曲刃をした鋤先工具痕が玄門部付近から右側壁に見られた。

### ●墓前域

本横穴の墓前域も茶畑の開墾により削平されており、残存状態は悪い。残存長は1.28 mで幅は不明である。開口部から八の字状に大きく開き、床面は開口部から階段状に三段の段差で下っていく。

### ●封鎖部

本横穴は円礫による河原石が、羨道左半部に床面より30 cm程浮いた状態で検出したが、石積みがされていないため、原位置を保っていないと判断できる。

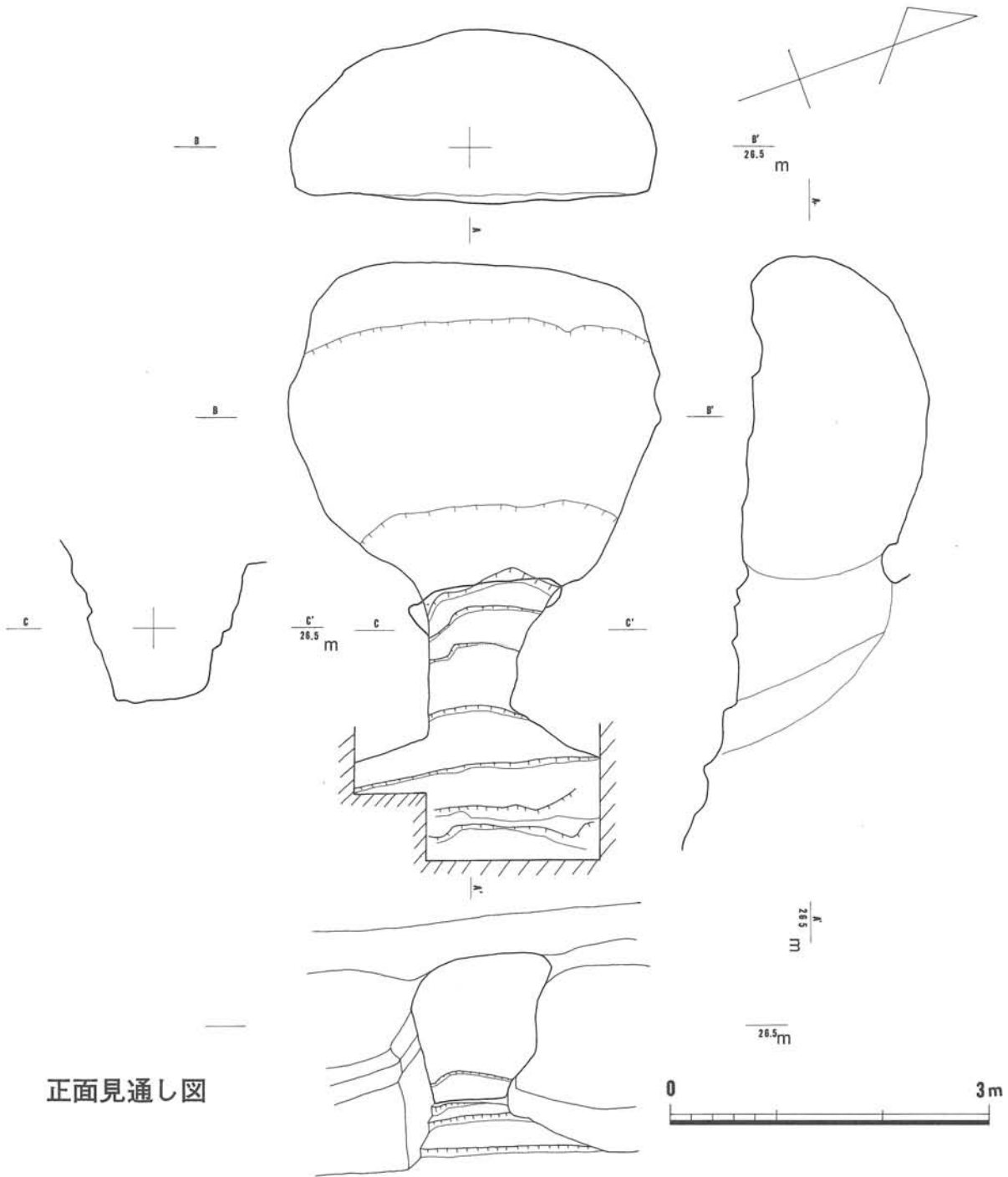
### ●出土遺物

本横穴から遺物の出土はなかった。

## 第9節 第9号横穴について

### ●調査前の状況

本横穴は、本調査中の最後に発見された。第2号及び第7号横穴の間に位置するが、当初地山の検出を目的に表土剥離をおこなっていたが、なかなか地山が検出されず横穴であるという判断がしばらくできない状況であった。

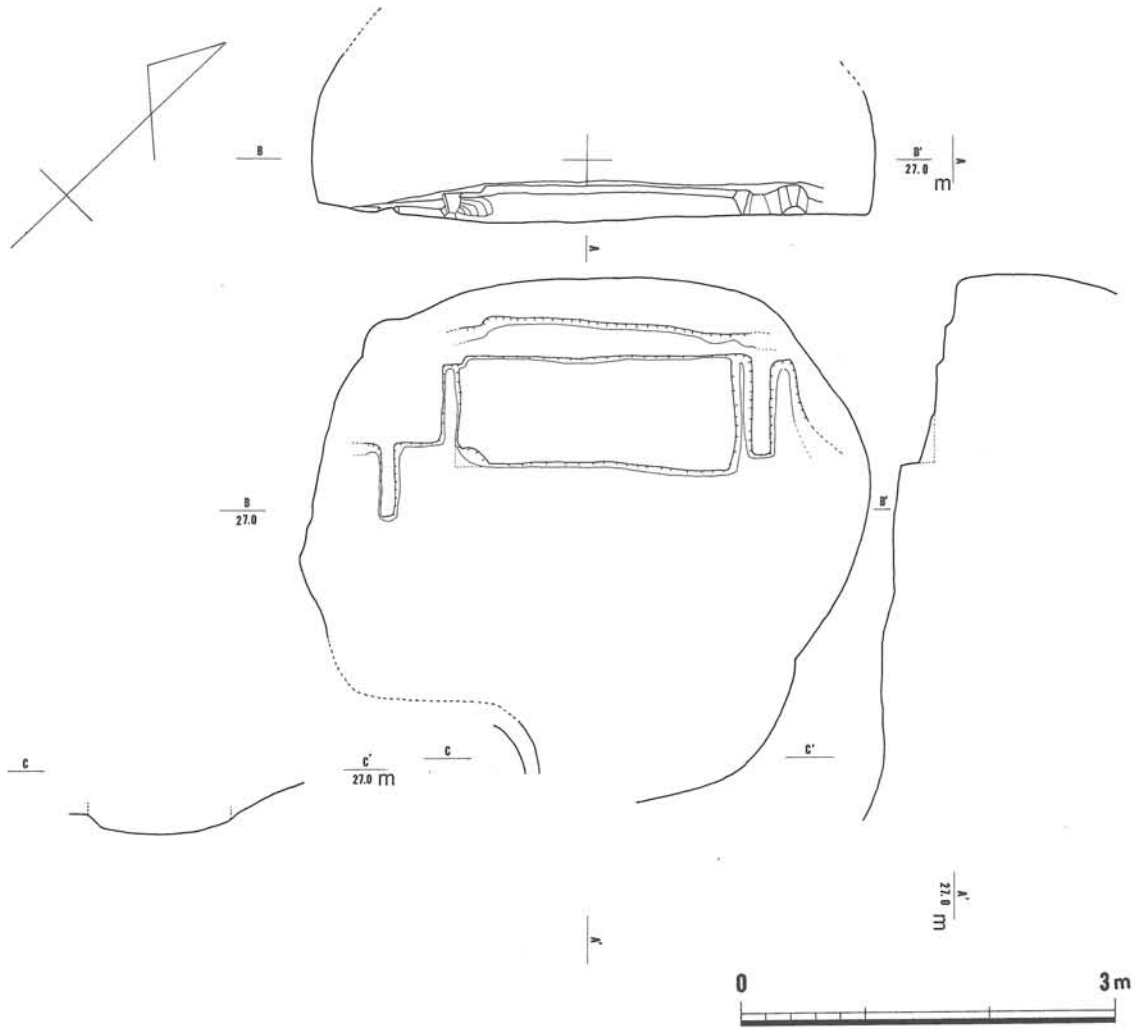


第11図 第8号横穴実測図

●玄室・羨道部

本横穴の主軸はN-46.5°-Wを指す。玄室は玄門部・玄門部付近右側壁・同じく左側壁の一部及び天井部全体が全く残存していない。玄室の平面形は円形を呈すると想像されるが、床面から見ると、玄門部の左右が対称になっておらず、判断できない。玄門部右半部の残存している屈曲部を基準として測ると玄室残存長は3.5mで最大幅4.54mである。横断面形は蒲鉾形を呈すると予想されるが、天井部が全くなく、壁面も床面よりわずかに立ち上った部分しか残存していないため、不明である。玄室床面の奥壁寄りに、主軸と直交する方向に造りつけ棺座が設けられている。その棺座の左右側壁付近は、棺座より低い床面より若干高いレベルになっており、1本の溝で分けられている。

床面は、棺座で段差があるほかはほぼ平坦で奥壁付近の海拔レベル27.04mで玄門部付近は26.46mである。



第12図 第9号横穴実測図

●工具痕の観察

壁面がほとんど残存しておらず、工具痕も観察できない。

●墓前域

本横穴の墓前域も茶畑の開墾により削平されており、残存していない。

●出土遺物

本横穴からは須恵器のみ3点で、無蓋高坏1点がほぼ完形で棺座と右側壁の間から横転して出土した。また、無蓋長脚二段三方透し高坏1点が無蓋高坏と同地点に破片状態で出土した。さらに玄室のほぼ中央の棺座の直下に破片状態で横瓶が1点出土した。尚、それ以外では、須恵器坏身の破片が4点・坏蓋3点が出土している。

## 第10節 その他の遺構について

当該開発事業区域内において、本横穴群以外の遺構が検出されたことについては先に述べたとおりである。これは遺跡詳細分布調査時には、地形が墳丘を思わせる様相を示しており、古墳ではないかと考えた。また、頂部中央には『行者之墓』なる墓銘の墓石があったため、付近にて古老及び土地所有者からの聞き取り調査を実施した。

話しによると、先代の土地所有者が当地を所有した時に、ここには「即心成仏」の墓があると聞き大正時代に墓を建立したという。「即心成仏」は密教の修行僧（行者）が訪れ相次ぐ飢饉のため民衆の代表として穴を掘り内部にて命の続くかぎり読経をしたという。また、ここ以外にもさらに2ヶ所に同じような言い伝えのある墓があり、それら3ヶ所を線で結ぶと一直線になり、これを三ツ星といい、北側から順に「梅王・松王・桜丸」と呼ばれていたという。この第1号土坑は「桜丸」に当たるが、「松王」については台地上に祠があり祀られていたが、道路拡張などにより台地が削平されてしまい消滅している。「梅王」については、現在手つかずで小さな祠に祀られている。（下記、位置図参照）

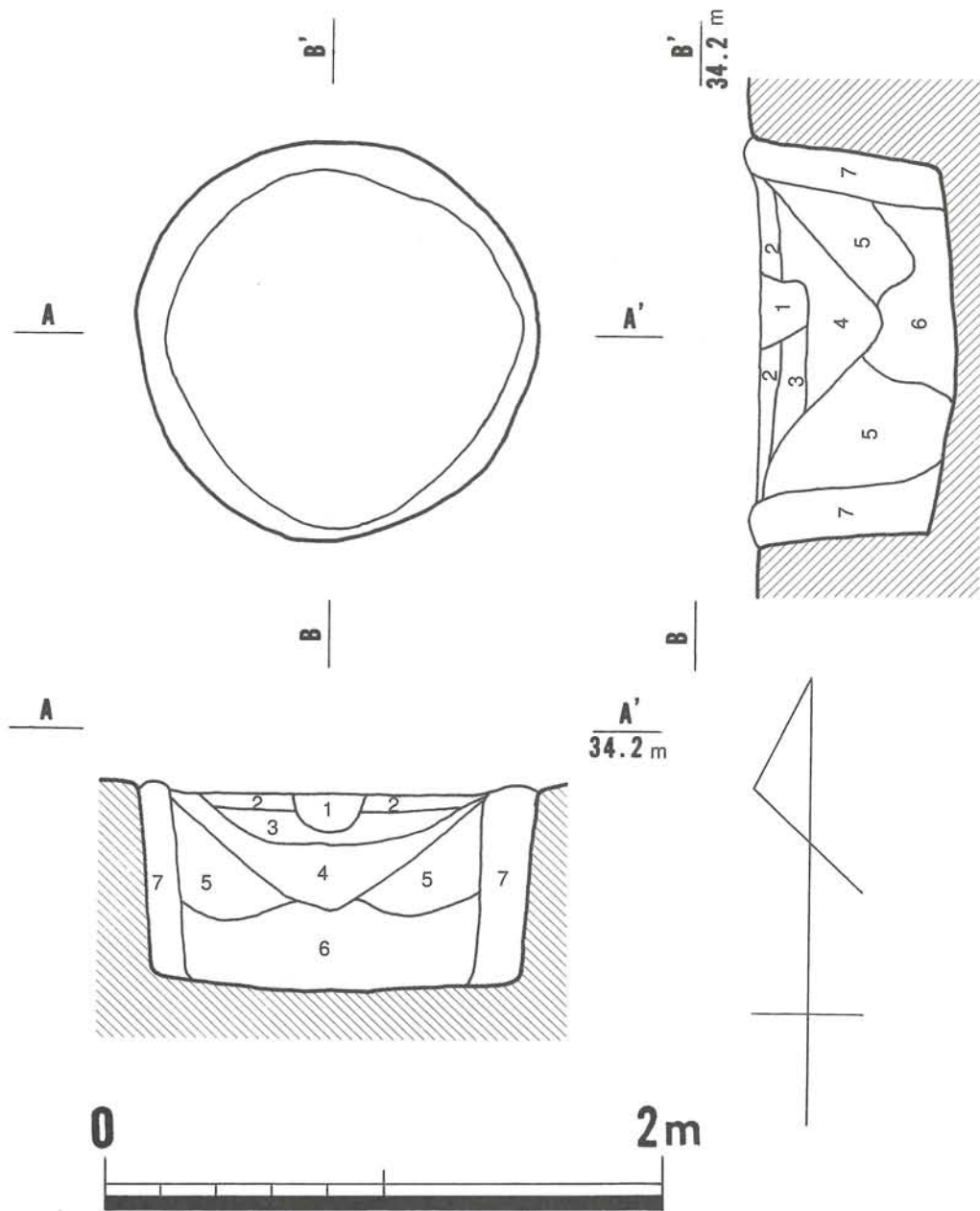
第1号土坑の平面形は円形を呈し、径140cm、深さは最深で72cmの規模である。底面はほぼ平坦で、円筒状に掘られている。壁面には地山をブロック状に砕いたものを積んだ形跡がある。

覆土は7層に細分される。第1層は、褐色土層で粘性しまりとも強く、粘土粒子を多量に含んでいる。第2層は、黄色土層でしまりあり、粘性強い。第3層は、黄褐色土層でしまりややあり、粘性強い。第4層は、黒褐色土層でしまりあまりなく、粘性強い。第5層は、褐色土層でしまりあり、粘性やや強い。第6層は、黄茶褐色土層でしまりあり粘性強く、地山の岩盤ブロックを多量に含む。第7層はブロック層で、壁面に貼り付けて積んでいるようで、棺を支えるための補強とも考えられる。

遺物は、香鉢形土器1点・かわらけ5点・鉄製釘20本・古銭6枚が出土した。







第13図 第1号土坑実測図

## 第6章 遺物について

本横穴群からは多くの遺物が出土した。ここでは特徴のある遺物を中心に説明を記載する。

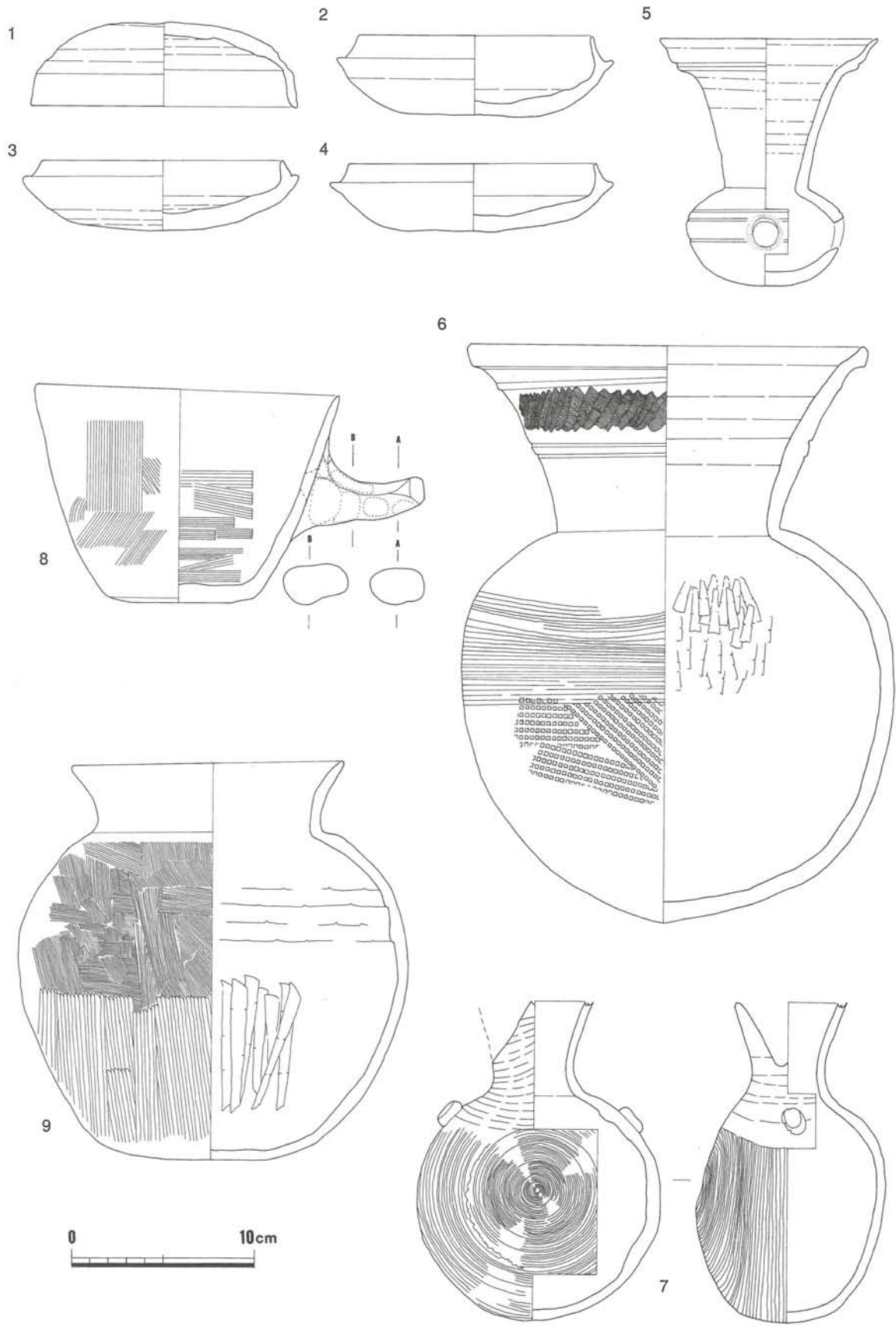
### 第1節 第1号横穴出土土器について

#### ●須恵器 (第14図1～7)

(1)は坏蓋で、口縁部と体部の境は不明瞭、頂部から緩やかに内湾して口縁部に至る。頂部から左回転ヘラケズリされ、体部から口縁部まではナデ調整している。胎土は白色粒子を含む砂粒子で緻密、焼成はやや不良、色調は暗灰色を呈する。(2)・(3)・(4)は坏身で、(2)は、やや内傾する口縁部と断面三角形の蓋受け部を有し、やや平底を呈する。胎土は最大1mmまでの白色粒子を少量含む緻密で、焼成は不良、色調は淡灰色を呈する。(3)は、やや内傾させた口縁部を肥厚させ、断面三角形の蓋受け部を有し、体部を丸くつくる。底部外面はヘラケズリされている。胎土は最大1mmまでの白色粒子を少量含む砂粒子で緻密、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。(4)は、内傾する口縁部を薄くつくり、断面三角形の蓋受け部を有し、底部はやや平底を呈する。胎土は最大1mmまでの白色粒子を少量含む砂粒子でやや粗、焼成は不良、色調は灰色を呈する。(5)は甕で、外反しながら立ち上がる口縁部と頸部の境に稜を設け、その口縁部側に一条の沈線を巡らせ、外反する頸部は断面長円形の体部と接合する。肩部には一条の沈線を巡らせており、さらに体部中央には穿孔を有し、その上下にも二条の沈線を巡らせる。全体を丁寧にナデ調整し、底部に「-」のヘラ記号がある。胎土は砂粒子を多く含む密で、焼成は良好、色調は灰色を呈する。(6)は広口甕で、丸底の胴部に大きく広い口縁部を付す。口縁部は口縁端部を断面三角形につくり、二段の突帯の間を波状文帯で埋める。胴部はタタキ整形をした後、胴部中程から肩部にカキ目調整を施す。内面はナデ調整を加える。胎土は砂粒子を多く含む密で、焼成は良好、色調は灰色を呈する。(7)はボタン状の提手を付した提瓶で、口縁部は欠損している。外反して立ち上がる頸部と体部と接合し、一面を回転ヘラケズリし、一面をカキ目調整する。胎土は白色粒子多く含む緻密で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。

#### ●土師器 (第14図8～9)

(8)は把手付鉢である。全面ハケ調整した平底の鉢に、指頭整形の牛角状の把手を付す。胎土は砂粒子を含む緻密で、焼成はやや不良、色調は橙褐色を呈する。(9)は短い口縁部を付した平底の球胴の甕である。口縁端部を弱い玉縁につくり、外面は肩部より下をハケ調整し、特に胴部下半をタテハケ調整する。胎土は最大3mmまでの小石を含む砂質で緻密、焼成はやや不良、色調は橙褐色を呈する。



第14图 第1号横穴出土土器实测图

## 第2節 第2号横穴出土土器について

### ●須恵器(第15図1~25)

(1)~(7)は、坏蓋である。(1)・(2)は小さな尖頭状のつまみを付し、身受けをつける蓋である。胎土は白色粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は外面は灰色で自然降灰がある。また、内面は淡灰色を呈する。(3)は擬宝珠状のつまみを付し、身受けを有する蓋で(24)の高台を持つ坏とセット関係をなす、7世紀末の好資料である。(4)~(7)の坏蓋は、頂部から口縁部にかけて丸くつくり、頂部にはヘラケズリ調整され、体部から口縁部はナデられている。(4)・(5)の口縁部はやや垂下し、(6)・(7)の口縁部は八の字状に開き口縁端部を薄く仕上げる。(4)~(6)の胎土は最大1mmまでの白色粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。(7)の胎土は砂粒子を含み密で、焼成は不良、色調は外面が灰色、内面は橙褐色を呈する。

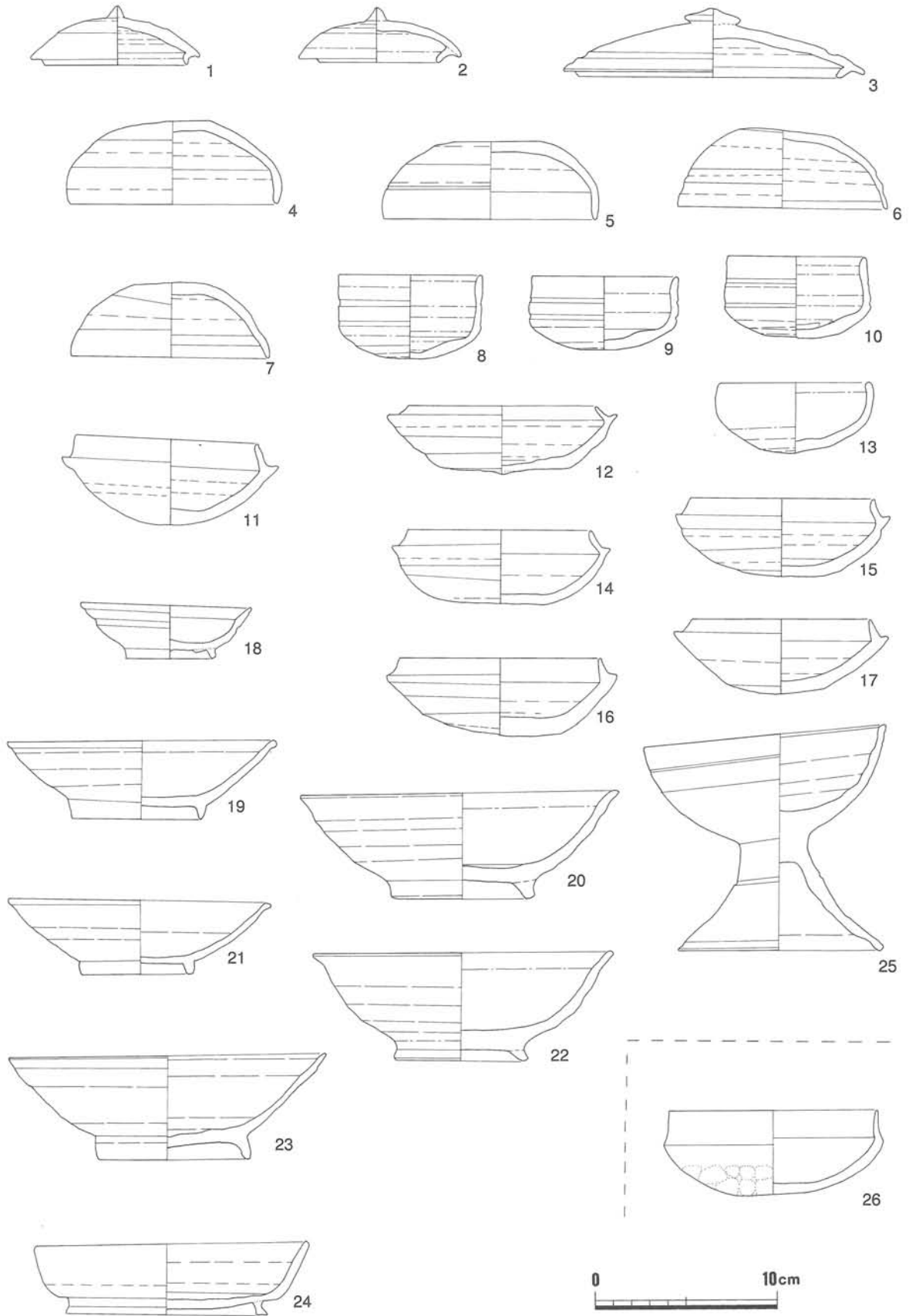
(8)~(10)は坏身で、口縁部は巾広く直立して、体部外面には二条の沈線を巡らせている。底部は丸底で、ヘラケズリ調整されている。また口縁の平面形は、正円形でなく長円形に施されている。胎土は最大1mmまでの白色粒子を少量含み緻密で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈し、内面には自然降灰がみられる。

(11)・(12)・(14)~(17)の坏身は、内傾する口縁部と断面三角形の蓋受け部を有し、丸底を呈する。(12)・(17)は蓋受け部を玉縁化している。底部は回転ヘラケズリされ、体部からは丁寧にナデられている。胎土は最大2mmまでの白色粒子の砂粒子を含み緻密で、焼成は(14)~(16)は良好、(11)・(12)・(16)は不良、色調は(14)・(15)が暗灰色のほかは白灰色で、(11)・(17)の内面は淡橙色を呈する。(13)の坏身は内湾する口縁部を有し、底部を丸くつくる。内面に自然降灰があることから坏身と判断される。口縁部から体部はナデ調整をし、底部はヘラケズリされている。また、これも口縁平面形を長円形につくっている。胎土は白色粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は淡灰色を呈する。尚、胎土と降灰が(1)・(2)と類似している。

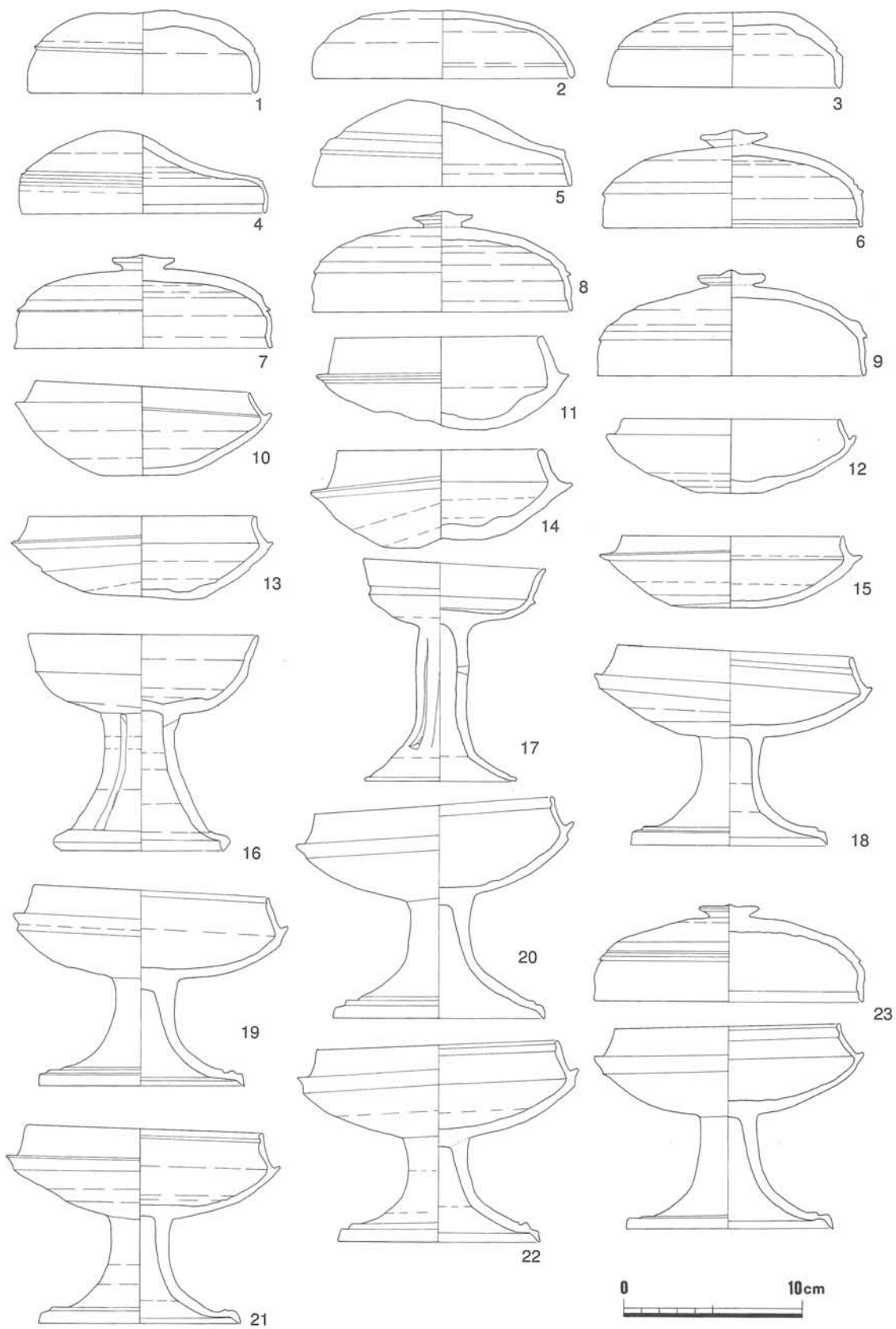
(18)~(23)は山茶碗で、(18)は口縁端部内面を屈曲させ薄く仕上げている。全面に丁寧なナデ調整が施される。胎土は砂粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は明灰色を呈する。

(19)は略爪形高台を付す灰釉陶器碗で、白色の発色の悪い施釉をする。(20)は方形高台を付す山茶碗で、底部の糸切り痕を高台の接合で消している。内面には自然降灰が見られる。胎土は砂粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は淡灰色を呈する。(21)は内面に他の高台の輪郭が見え、さらに口縁部外面にも他の口縁端部が付着するなど、重ね焼きの痕跡をとどめる。また、内面全体と外面口縁端部に施釉されている。

(24)の坏身は前述の(3)とセット関係にあり、体部からやや外反して立ち上がる。高台の内側はヘラケズリされているが、体部からはナデ調整が丁寧に施されている。7世紀末のものと考えられる。(25)は無蓋高坏で、坏部を丸くつくり、口縁部はやや開き、口縁端部に一条の沈線を巡らせる。脚部はラッパ状に開き、脚端部を丸くしやや薄く仕上げている。脚部には一条の沈線を施す。全体に丁寧なナデ調整を施している。胎土は白色粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。



第15图 第2号横穴出土土器实测图



第16图 第3号横穴出土土器实测图(1)

### ●土師器 (第15図26)

口縁端部を丁寧にナデ調整して薄く仕上げ、直立させている坏身である。体部と口縁部の境に稜を持ち、体部下半から底部には指頭押さえで整形している。胎土は最大1mmまでの白色粒子の入る砂粒子で緻密、焼成はやや不良、色調は橙褐色を呈する。これは7世紀前半のものと考えられる。

尚、これらの遺物のうち(1)・(2)・(4)～(15)・(17)・(26)は、玄室右半玄門部付近より一括して出土した遺物である。

## 第3節 第3号横穴出土土器について

### ●須恵器 (第16・17図1～27)

(1)～(5)は坏蓋である。頂部から体部を湾曲させ、(1)及び(3)～(5)は口縁部との境に稜を有し、(2)・(5)は口縁部を外反させ、それ以外は口縁部を垂下させる。頂部は右回転ヘラケズリされ、体部から口縁部はナデ調整され、内面も丁寧にナデられている。胎土は砂粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は(1)・(3)が暗灰色、(2)・(4)・(5)が灰色を呈する。

(6)～(9)は有蓋高坏蓋で、頂部をやや平坦につくり、中心をとがらせた偏平なボタン状のつまみを付す。体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は外反気味に垂下させる。(6)は口縁端部を玉縁化させ、(7)・(8)は丁寧にナデて口縁端部を薄くし、やや外反させる。胎土は最大1mmまでの白色粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は灰色で外面一部に自然釉が掛かっている。

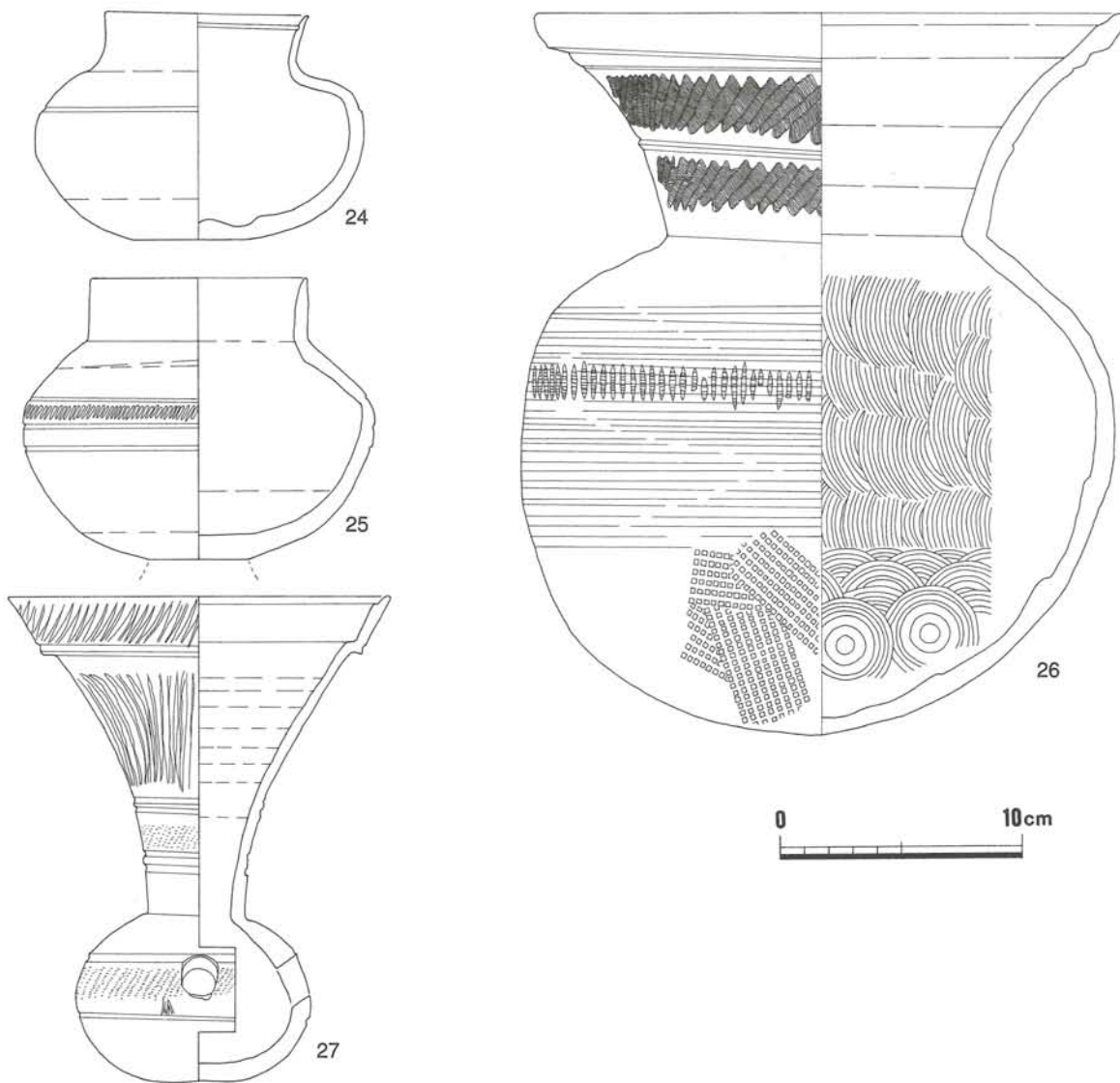
(10)～(15)は坏身である。内傾する口縁端部を肥厚させ、断面三角形の蓋受け部を有するもの(11)・(14)・(15)と、口縁端部は薄く仕上げ、内面をカーブさせ蓋受け端部を玉縁化しているもの(10)・(12)・(13)に分けられる。前者の(11)・(14)は器厚が厚く歪みも大きい。いずれも底部から体部上半にはヘラケズリ調整され、体部上半から口縁部は丁寧にナデられている。胎土は最大1mmまでの白色粒子と砂粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は灰色を呈する。

(16)は長脚一段三方透かし付無蓋高坏で、坏部は丸くつくられ不明瞭な稜を有する。口縁部はナデ調整し薄く仕上げ、やや外反する。脚部はラッパ状に開き、脚部裾に稜を持ち内側にかえす。脚部の透かしは一段で、坏接合部から脚部裾まで三方向に施す。胎土は白色粒子を多量に含む砂質で緻密、焼成は良で、色調は明灰色を呈する。

(17)は長脚一段一方透かし付無蓋高坏である。坏部には稜を有し、口縁部は外反して立ち上がる。脚部は円筒状に延び、裾手前でラッパ状に開く。脚部には一方向に一段透かしを有し、もう一方に円孔を1箇所有する。胎土は白色粒子を含み緻密で、焼成は良、色調は灰色を呈し、坏部内部には自然釉が掛かっている。

(18)～(22)は有蓋高坏で、口縁端部を玉縁化し、口縁部を内傾させ蓋受け部を有する。坏部体部から口縁部はナデ調整され、脚部との接合部分はヘラケズリされている。脚部はラッパ状に開き、脚端部は断面三角形で垂下する。脚部裾には明確な稜を有する。胎土は最大1mmまでの白色粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は灰色を呈し、一部に自然釉が掛かっている。

(23)は短脚高坏蓋と短脚高坏のセットである。短脚高坏蓋は、頂部に偏平な擬宝珠状のつまみを付し、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は垂下させ口縁端部を玉縁につくっている。



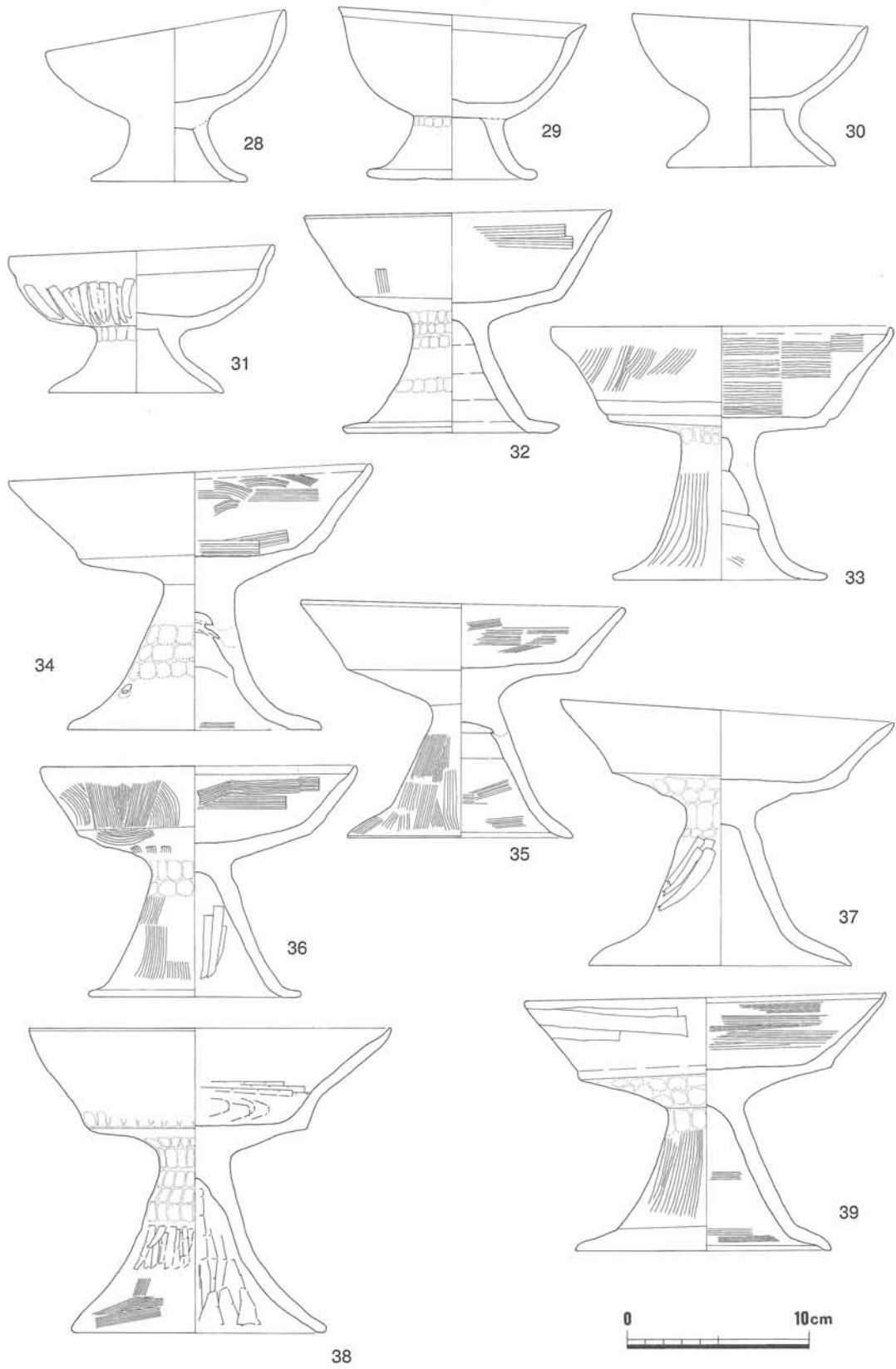
第17図 第3号横穴出土土器実測図(2)

短脚高坏は、口縁端部を玉縁化し蓋受け部をシャープにつくり、脚の端部を下方に屈曲させて裾部に突帯を一条巡らす。蓋・高坏とも胎土は最大1mmまでの白色粒子を多量に含み緻密で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈し、一部に自然釉が掛かっている。この蓋と高坏は合わさった状態で出土したが、内部からは何も検出されなかった。

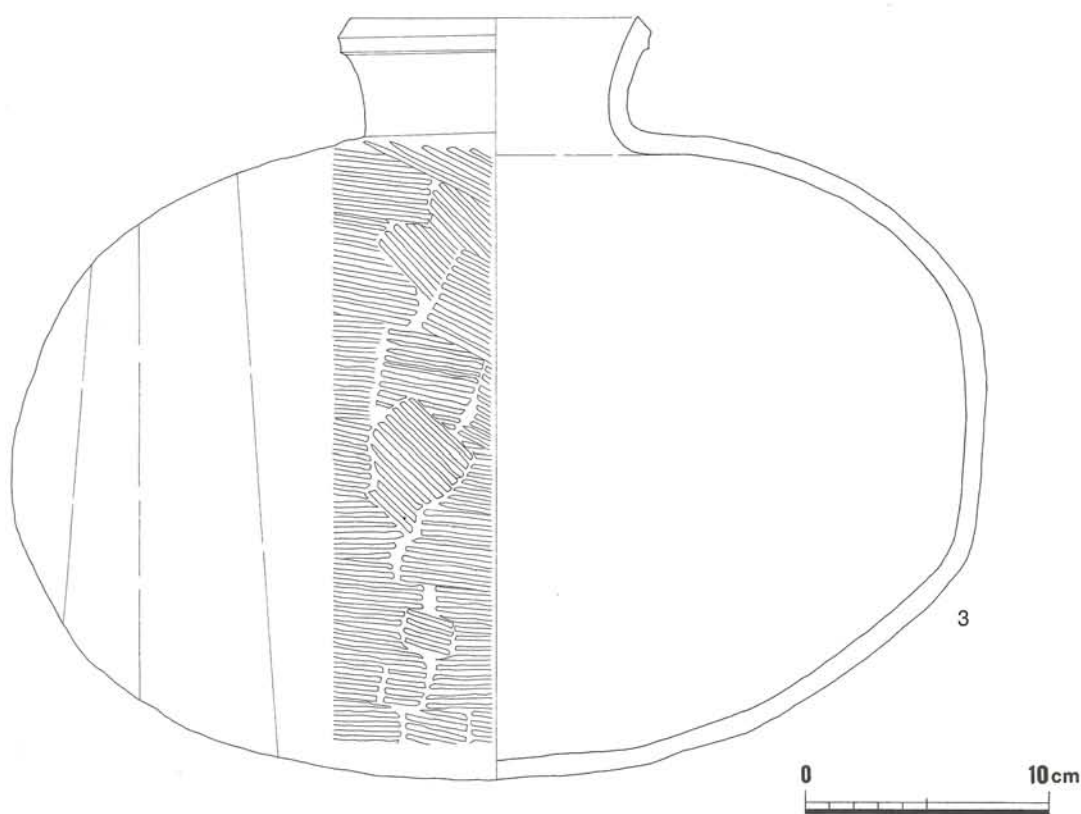
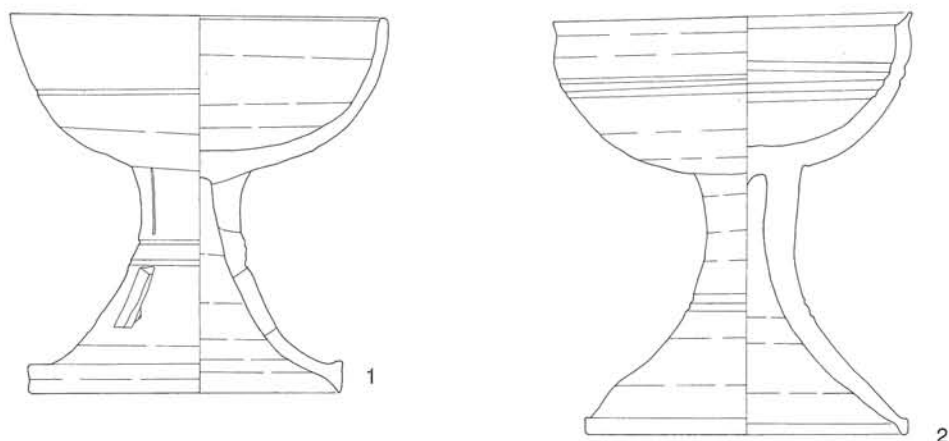
(24)短頸罎である。立面横長円形の胴部上半に一条の沈線を巡らせ、口縁部はやや外反する。口縁端部内面にも一条の沈線を施す。胎土は最大1mmまでの白色粒子を多量に含み緻密で、焼成は良好、色調は灰色を呈する。

(25)は有蓋脚付短頸罎である。球胴状の中央部付近に、二条の沈線で区画した内部にキザミを有し、その下にさらに一条の沈線を施す。口縁部は丁寧にナデられ直立する。底部には剥落した痕跡があり脚付と判断できるが、脚はおそらく長脚で三方透かしであろう。胎土は砂粒子





第18图 第3号横穴出土土器实测图(3)

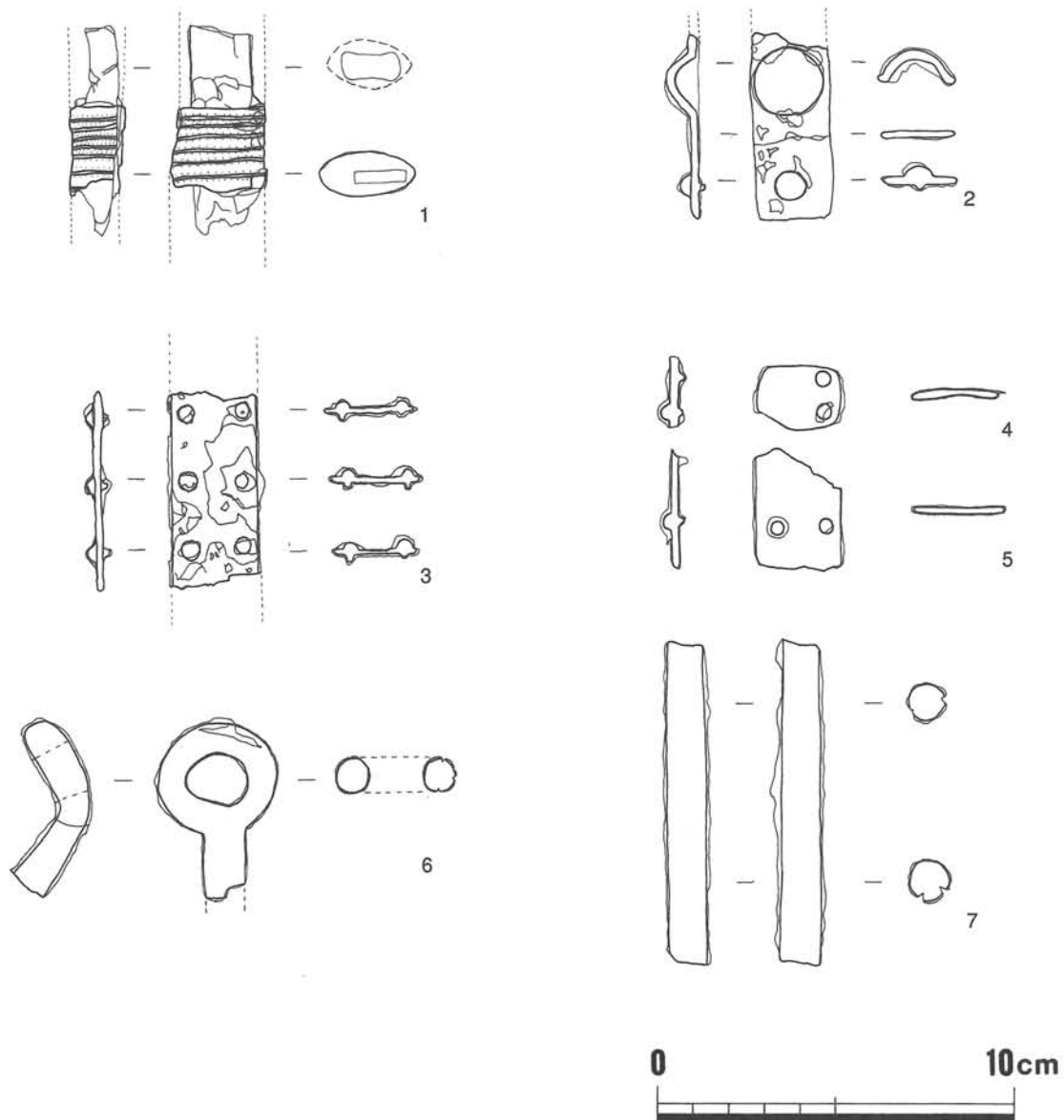


第19図 第9号横穴出土土器実測図

を含み緻密で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈するが、口縁部から肩部にかけて色調が異なっており、蓋があったとおもわれる。

(26)は広口甕で、丸底の胴部に大きく広い、外反する口縁部を付す。口縁端部は肥厚させ、口縁部に二段の突帯の間を波状文帯で埋め、さらに下段の突帯の下部にも波状文帯を施す。胴部はタタキ整形をした後、肩部から胴部中程にカキ目調整を施す。内面は青海波文である。胎土は砂粒子を含み緻密で、焼成は良好、色調は灰色を呈する。

(27)は甕ある。大きく開くラップ状の口縁部を有し、口縁端部を略玉縁化する。口縁部と頸部の境を突帯で区画する。口縁部と頸部上半にはヘラ掻きが施され、さらに頸部下半に二条の沈線を上下に巡らせ、その中側にクシ刺突を施す。球状の体部の中央にもクシ刺突が施され、その上下に沈線を巡らせている。胴部の中央には、やや上向きに穿孔を有する。胎土は最大1



第20図 玉体横穴群出土鉄製品実測図 (1)

mmまでの白色粒子を極少量含み緻密で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈する。

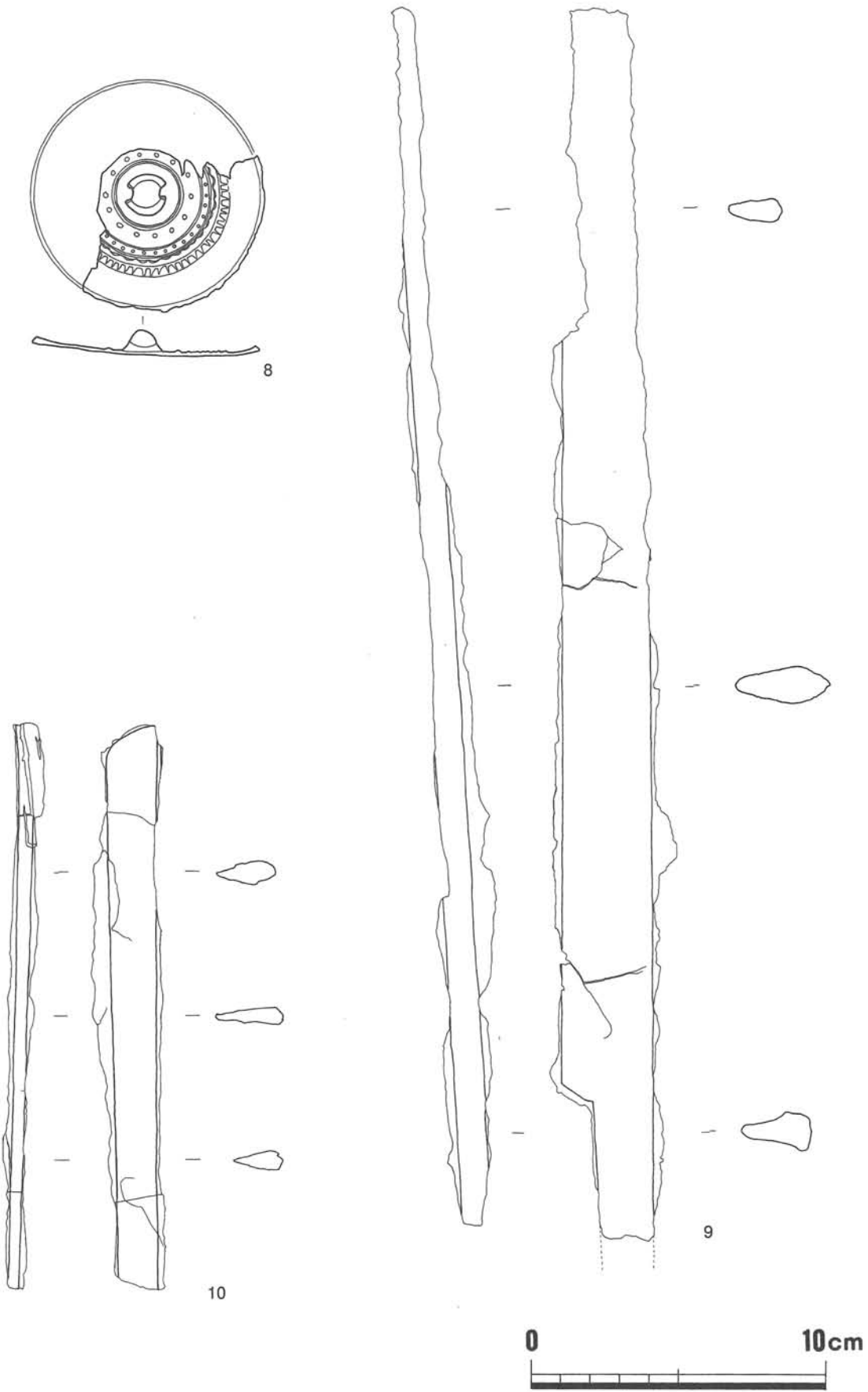
●土師器 (第18図28~39)

本横穴から出土した土師器は高坏のみである。

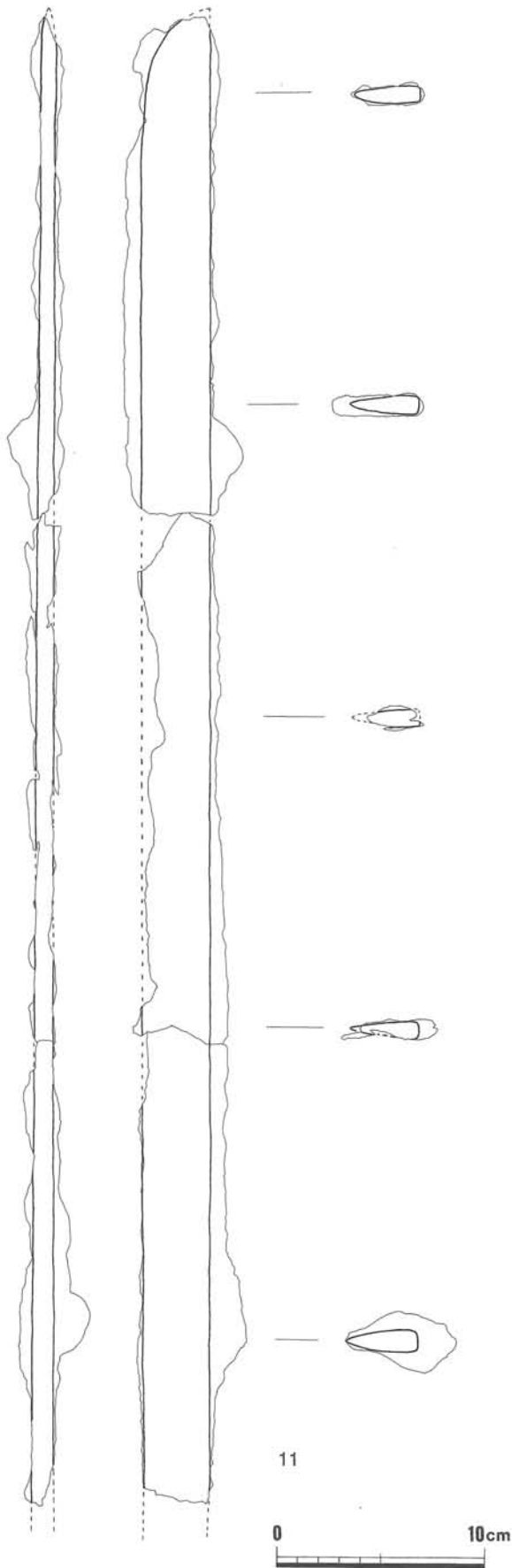
(28)~(30)は、坏部を丸くつくり、稜のない高坏で脚が短い。(29)は、坏部と脚部の接合部分に指頭押さえが見える。また、口縁端部を薄くしている。

(31)は、坏の口縁部がやや屈曲して広がり、脚が短い高坏である。坏部にはタテ方向にヘラケズリされている。

(32)~(39)は、坏部に稜を有し、脚部の長い高坏である。坏部では、稜の部分から逆八の字状に口縁部が開き口縁端部を尖らせるもの(32)・(37)、口縁端部を薄く仕上げやや内側へ内傾させるもの(33)・(36)・(38)・(39)、口縁端部をそのままナデ調整して丸くするもの(34)・(35)がある。



第21図 玉体横穴群出土鉄製品実測図(2)



第22図 第3号横穴出土直刀実測図

また指頭整形の後ハケ調整をしているが、坏部と脚部の接合するところでは指頭押さえが残る。(34)は、ハケ調整がなされておらずまた、脚部下半には貫通していない孔が1点ある。

#### 第4節 第9号横穴 出土土器について

##### ●須恵器 (第19図)

(1)は無蓋長脚二段三方透かし付高坏で、坏部を丸くし深くつくる。口縁部と体部の境に稜を有する。口縁部はナデ調整され、体部はヘラケズリされる。脚部の上半にスリット状の透かしを有し、同下半には方形透かしを有する。この二段の透かしを、二条の沈線を巡らせて区分けしている。脚部はラッパ状に開き、脚端部を断面三角形にして端部を垂下させる。胎土は砂粒子を含み緻密で、焼成は良、色調は明灰色を呈する。

(2)は無蓋高坏で、坏部は体部から口縁部を丸くつくり、口縁端部を尖頭させ先端を外反させる。体部には不明瞭な二条の沈線を巡らせる。坏部内面は深くつくり、弱いノタ目が残る。口縁端部内面は薄く仕上げたところで稜を持つ。脚部はラッパ状に開き、脚端部を断面三角形にし端部を垂下させる。脚部中央には不明瞭な稜を持つ。胎土は最大1mmまでの白色粒子を多量に含み緻密で、焼成は良、色調は明灰色を呈する。

(3)は横瓶である。横長の体部にはほぼ全面にタタキ目が施されているが、成形時に塞いだ痕跡はヘラケズリで消されている。短い口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部には断面三角形を呈する稜を有する。

## 第5節 金属製品について

### ●第2号横穴出土鉄製品（第20図1・2）

(1)は飾大刀の残存部と思われるもので、銀線蛭巻き大刀の茎部分である。鉄地部分の残存長は6.0cm、残存幅は1.7cmである。(2)は帯金具と思われるもので、残存長5.3cm、幅2.2cmである。これは鉄地金銅張帯金具で、ドーム状の装飾と銚が1点見られるが、反対側の欠損部分にも銚があったと推定される。

### ●第3号横穴出土金属製品（第20図3～5、第21図8～10、第22図、第23図、第24図20～28）

(3)～(5)は鉄地金銅張の帯金具と思われるもので、(3)は残存長5.6cm、幅2.3cmを測り、両端に一列に銚を施している。(4)は残存長1.7cm、幅2.3cmを測り、(5)は残存長3.3cm、幅2.3cmを測る。この(4)と(5)は同一製品と思われるが(5)は片側の銚が確認できない。

(8)は径7.9cm、紐高0.9cmを測る平縁珠文鏡である。圏線で区画された円部に二重に珠文を配し、その外側に波文帯と鋸歯文帯を巡らせていると想像される。ほぼ1/2が残存しているが、錆化が激しい。

(9)は平棟平造りの直刀で残存長42.8cm、関幅3.3cm、茎幅2.0cmを測る。切先は残っておらず、刃部も大きく欠損している。また、茎部分も完存していない。

(11)も平棟平造りの直刀で残存長71.4cm、刀身部幅3.3cmを測り、茎部分は残存していない。

(9)と(11)は同一地点で重なって出土しており、ともに錆化が激しい。

(10)も平棟平造りの直刀と思われるが、残存長19.5cm、刀身部幅1.8cmと規模が小さく小刀とも考えられる。

(20)は全長17.8cm、関幅1.8cm、茎幅0.8cmを測る平棟両関造りの刀子である。

(12)～(19)・(21)～(28)は鉄鎌である。

(21)～(23)は尖根片刃籠形式鎌と思われるもので、(21)は残存長8.8cm、幅0.8cm、(22)は残存長9.3cm、幅0.8cmの規模である。(12)～(14)も尖根片刃籠形式鎌の部分と考えられるが、刃部が残存していないため不明である。

(24)～(28)は平根両関造り三角形式鎌で、(24)は残存長5.5cm、関幅2.2cm、茎幅0.8cm、(25)は残存長4.5cm、関幅2.2cm、(26)は残存長7.8cm、関幅2.3cm、茎幅0.8cm、(27)は残存長8.6cm、関幅2.1cm、茎幅0.8cm、(28)は残存長9.1cm、関幅2.2cm、茎幅0.9cmを測る。

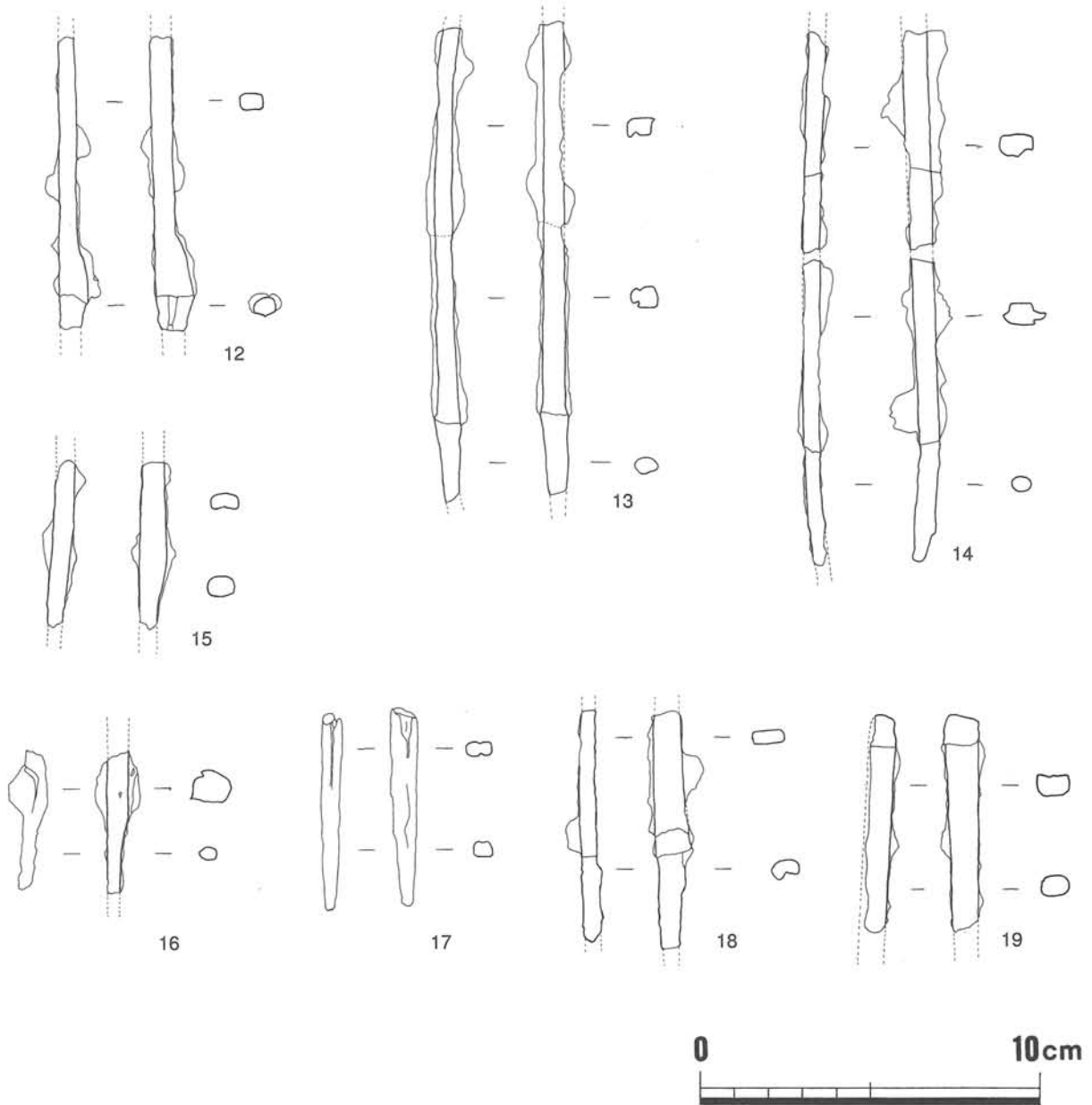
これら鉄製品は、水洗選別作業によって得られた資料も多く玄室内全体から出土しているが、なかでも比較的玄室左半部からの出土が多く、とくに(11)の直刀や(8)の鏡の周辺からまとまって出土している。

### ●第5号横穴出土鉄製品（第24図29～33）

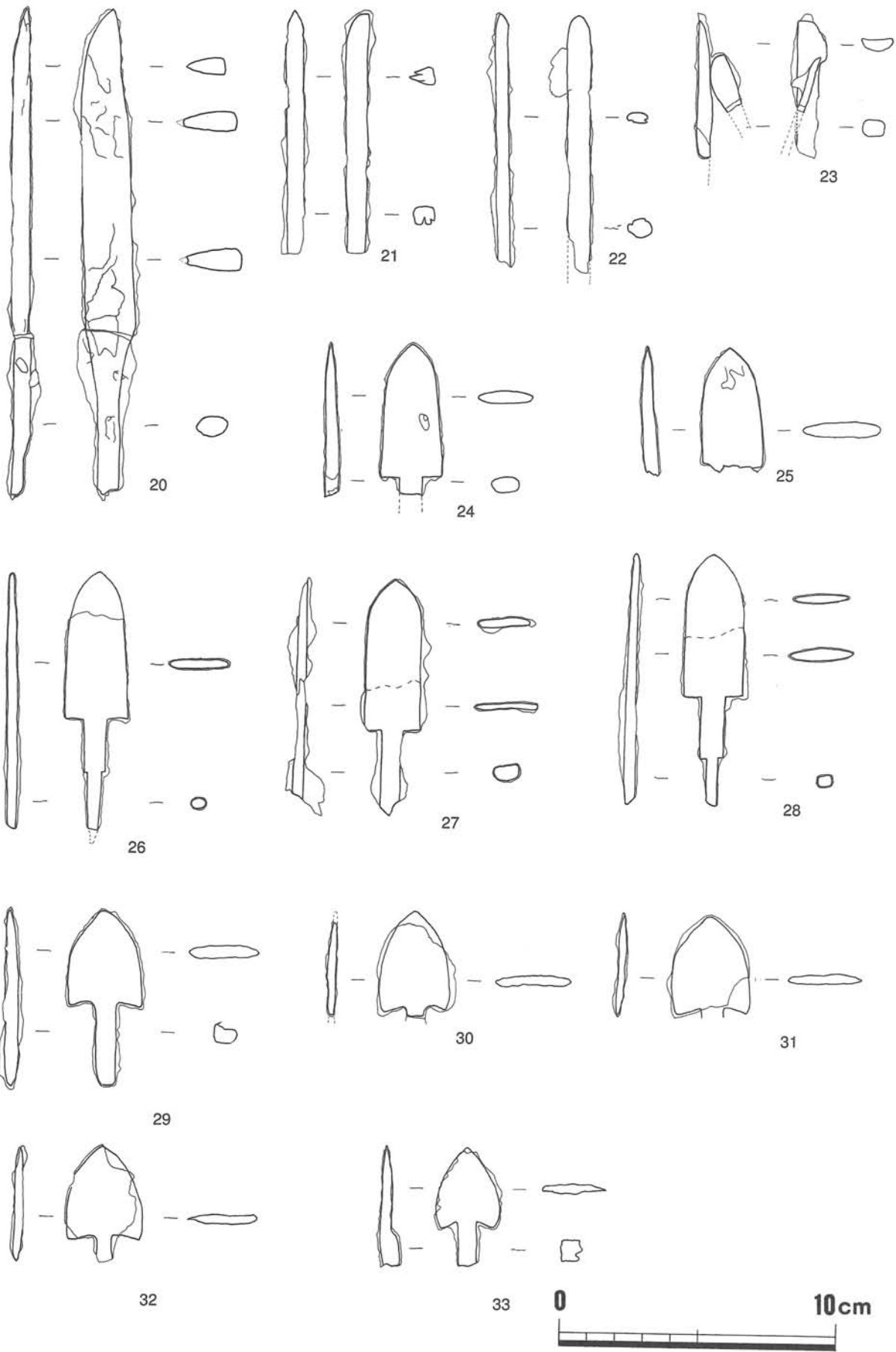
本横穴からは、水洗選別作業によって(29)～(33)の平根両関造り三角形式鎌が出土した。(29)は残存長6.4cm、関幅2.2cm、茎幅0.7cm、(30)は残存長3.3cm、関幅2.4cm茎幅0.7cm、(31)は残存長3.3cm、関幅2.7cm、(32)は残存長4.2cm、関幅2.7cm、茎幅0.7cm、(33)は残存長4.1cm、関幅2.1cm、茎幅0.7cmを測る。

### ●第7号横穴出土鉄製品（第20図6・7）

(6)と(7)は馬具の引手壺の軸部分である。(7)は棒状の部分であるが、(6)と同一製品と思われる。(6)は残存長5.0cm、環状部分の径3.4cm、孔径1.7cmを測り、(7)は残存長9.15cmを測る。これらは玄室右半部の開口部に近い地点から出土したが、床直から15cm程浮いた状態であった。

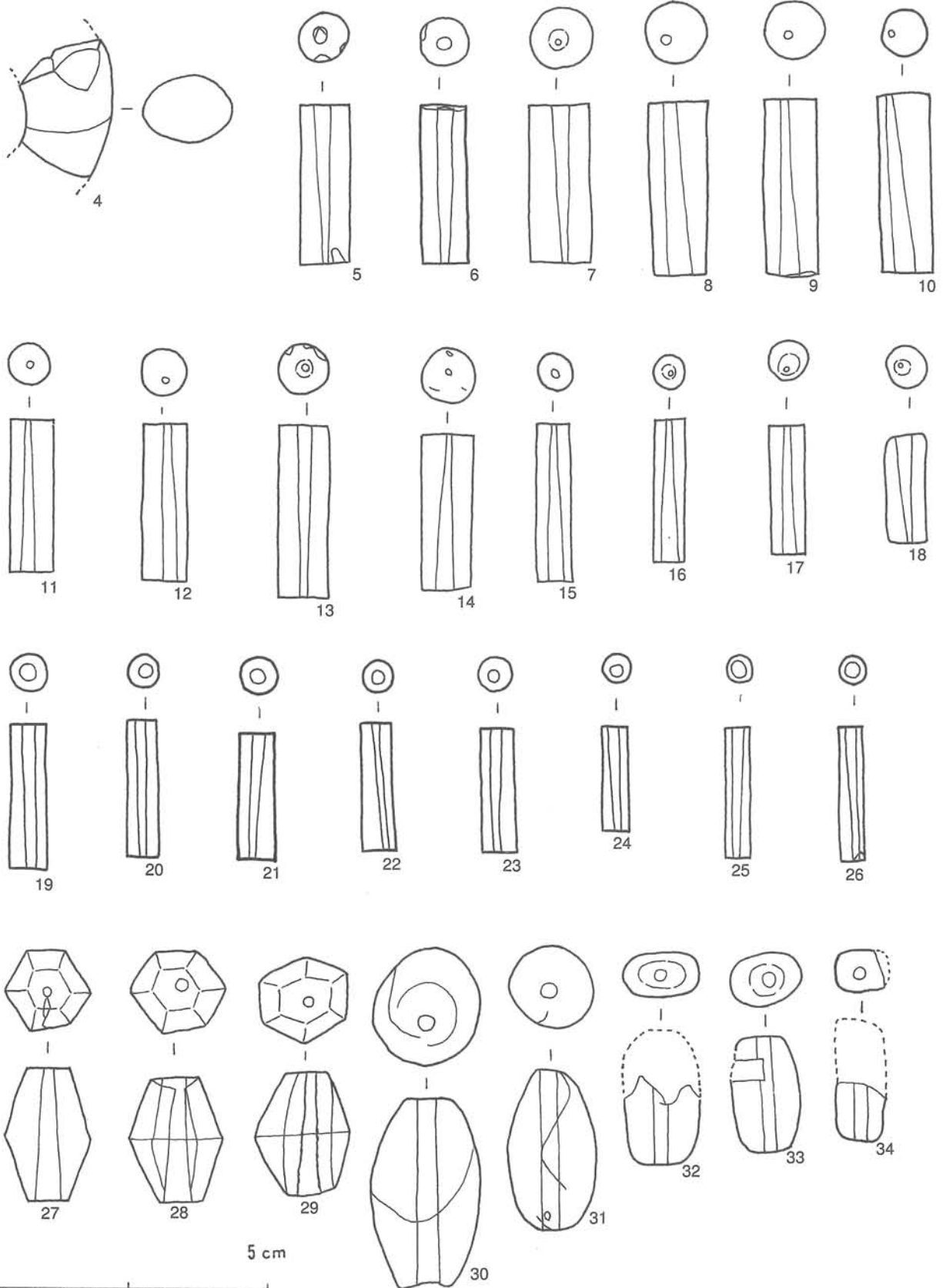
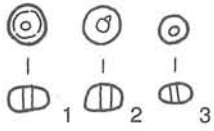


第23图 第3号横穴出土鉄製品実測図



第24図 玉体横穴群出土鉄製品実測図 (3)





第25图 第1·3号横穴出土玉类实测图

## 第6節 玉類について

### ●第1号横穴出土玉類(第25図1～3)

本横穴の玉類は、水洗選別作業により得られたもので小玉が3点出土した。

### ●第3号横穴出土玉類(第25図4～34、第26図、第27図)

本横穴からは多量の玉類が出土した。しかし、そのほとんどは水洗選別作業によって得られた資料であり、原位置を保って出土したものは少ない。その中でも、玄室内左半部から検出されたものが多く、とくに開口部側からの出土が多い。

出土玉類は、勾玉1点・管玉22点・切り子玉3点・棗玉17点・丸玉63点・小玉72点の合計178点である。

(4)は勾玉である。滑石製で色調は薄い青緑色を呈し、ほぼ3/4が欠損している。

(5)～(26)の管玉は全て碧玉製で色調は濃い緑色を呈している。

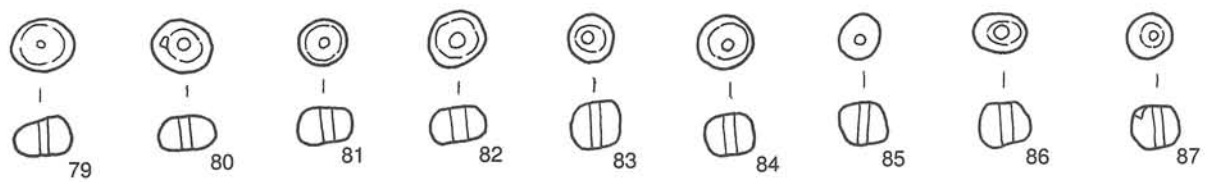
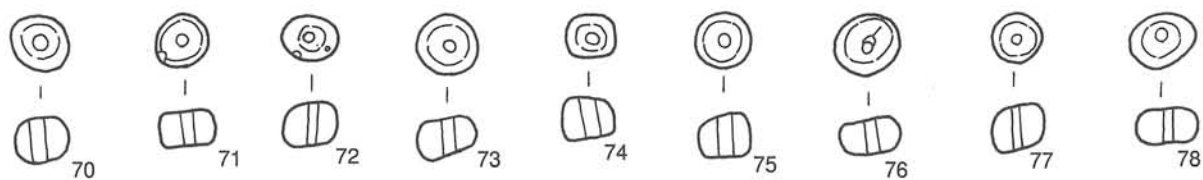
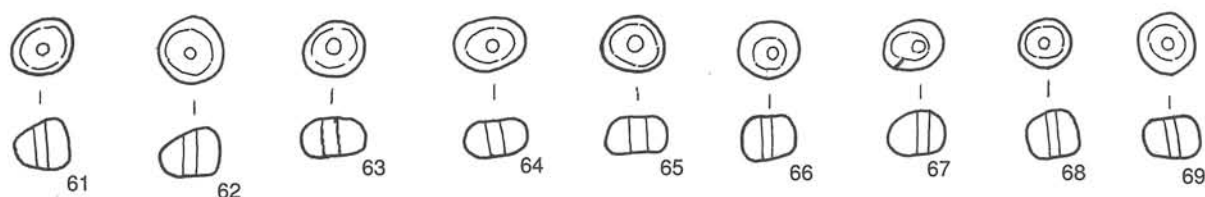
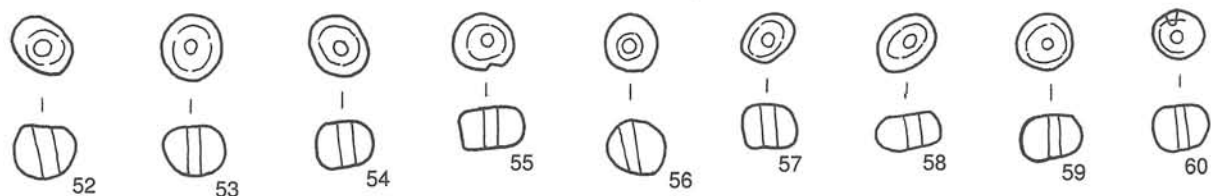
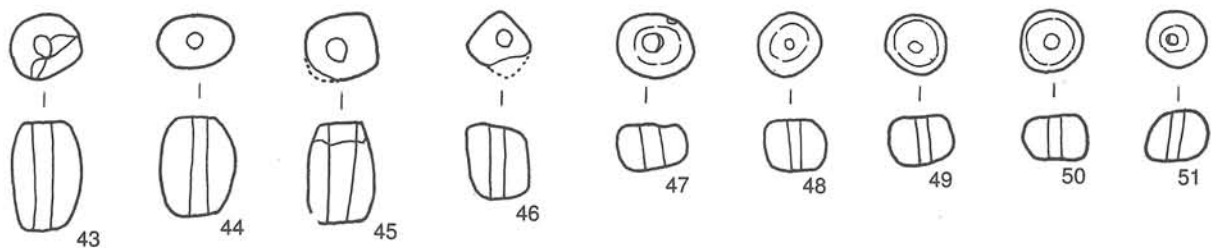
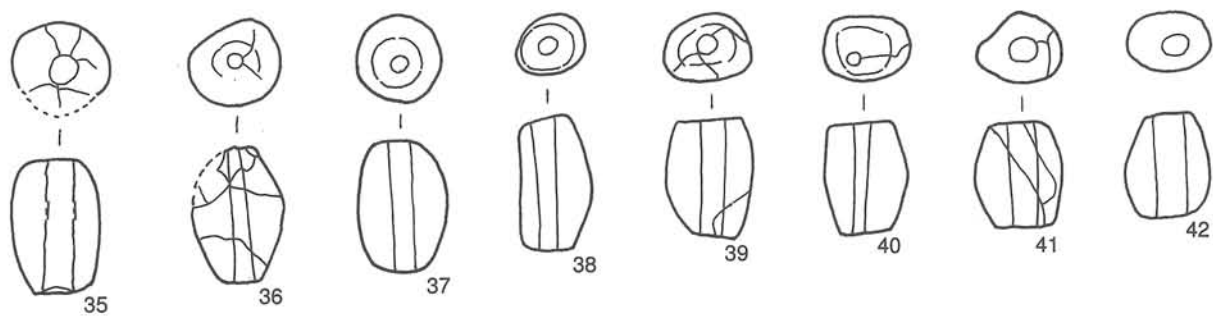
(27)～(29)の切り子玉は3点とも水晶製で完形品である。

(30)～(46)は棗玉で全て琥珀製であり、色調は濃い茶褐色を呈する。

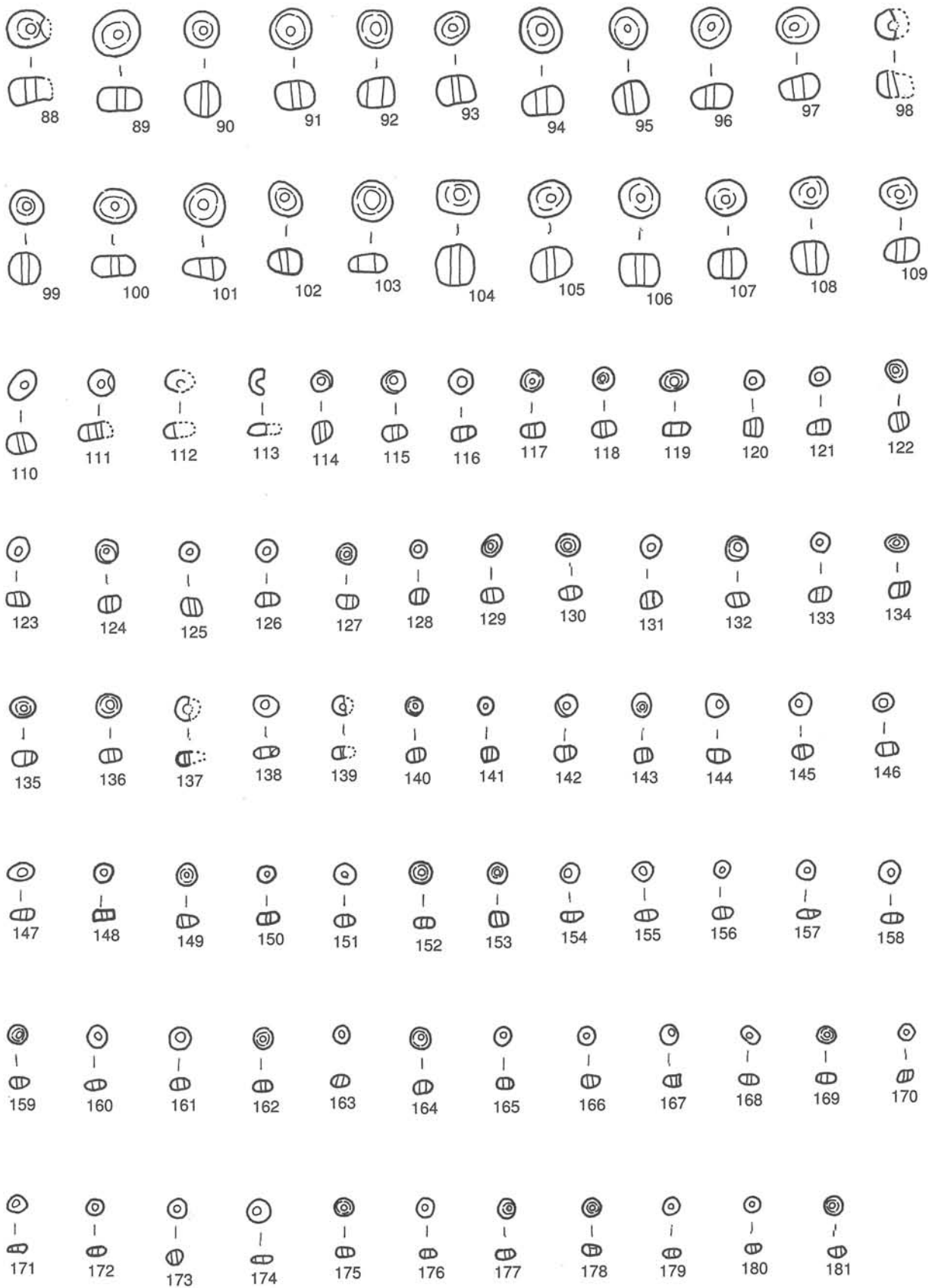
(47)～(109)は全てガラス製の丸玉で色調は濃青色、青色などを呈する。

(110)～(181)は小玉で全てガラス製で色調は濃青色、青色、緑色などを呈する。

また、(5)・(33)・(52)・(53)・(70)・(79)・(92)・(138)・(166)・(167)・(172)・(174)・(179)は第16図(7)の内部より検出されたものである。この有蓋高坏蓋は玄室床面に伏せた状態で出土しており、その蓋の内部の土砂に混ざって検出された。



第26图 第3号横穴出土玉类实测图(1)



第27图 第3号横穴出土玉类实测图(2)

## 第7節 第1号土坑出土遺物について

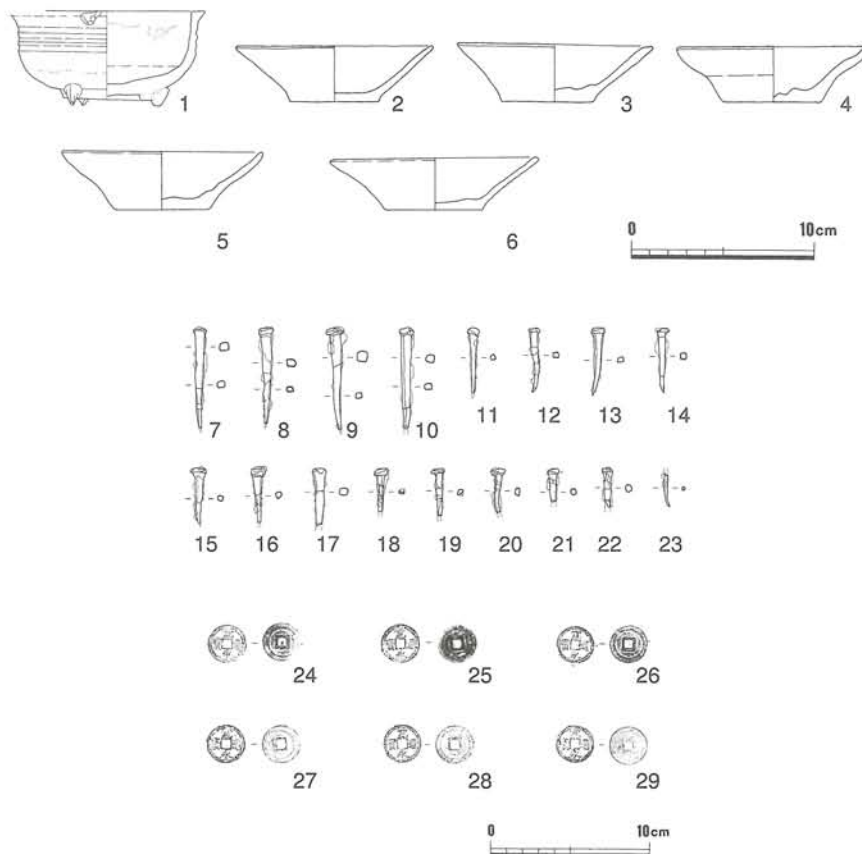
(1) は香鉢形土器である。口縁端部は平縁にケズられ、外側をややつまみ出して外反させている。体部上半には3条の稜を巡らせており、体部は碗状にカーブして底部に至る。底部は糸切り後、高台を付し、さらに、その外側の三ヶ所に略爪形の脚をつけている。口縁部から体部下半まで黒色の施釉がなされている。底部の作りが古く17世紀中頃～後半頃の志戸呂産と思われる。尚、使用痕がほとんどないため、未使用もしくは使用しても一回程度であると考えられる。口径は10.7cm、器高は5.2cmを測る。

(2)～(6) は、かわらけである。5点とも焼成が悪く、(2)は口径10.8cm、器高3.1cmを測る。口縁部は外半し、保存状態が悪いので調整が不明瞭である。(3)は口径10.7cm、器高3.2cmを測る。(4)は口径10.7cm、器高3.1cmを測る。(5)は口径11.0cm、器高3.2cmを測る。(6)は口径11.4cm、器高2.8cmを測る。これらのかわらけは16世紀の終わりから17世紀始め頃のものと思われるが、特に17世紀前半頃と考えて良いのではないかと考える。

(7)～(23) は鉄製くぎである。鉄製くぎは20本出土したが、部分片の残欠もあり、ここでは17本を図示した。

(24)～(29) は銭貨である。いずれも「寛永通宝」で江戸時代中期頃のもので古寛永と思われる。

以上の出土遺物から、土坑の年代は17世紀中頃から後半であると考えられる。



第28図 第1号土坑出土遺物実測図

## 第7章 まとめ

大東町には古墳時代後期の横穴が、多数存在することは古くから周知されていたが、考古学的な発掘調査例が少なく、その実態は依然不明であった。玉体横穴群の調査は、当町にとって「清水ヶ谷横穴群・松ヶ谷横穴」、「鳥見ヶ谷横穴群」に続いて3例目の横穴群発掘調査である。今回の発掘調査にて、多くの貴重な資料が得られた。これらの資料を基に本横穴群の様相を検証し、まとめとしたい。

出土した遺物及び横穴の形態から横穴の年代を判定し、玉体横穴群の築造年代を検証してみる。

第1号横穴は独立した1基の単独横穴で、本横穴群中でも比較的規模の小さい横穴である。玄室内部からは若い壮年の人骨が検出されている。また、6世紀後半の遺物が出土したことから、築造年代は少なくとも6世紀末頃と考えられる。

第2号横穴では、年代の違う多数の遺物が出土しており、追葬及び再利用された事が確認できる。出土土師器は7世紀初頭のものであるため、7世紀前半には築造されていると考えられる。また、7世紀後半の遺物や(3)と(24)は7世紀末のセット関係にある遺物である。さらに11世紀代と12世紀代の遺物が出土した。尚、付編として玉稿を賜った山口敏氏によると出土人骨は7体との鑑定結果もあり、結論として本横穴は7世紀前半に築造され、7世紀後半と7世紀末の2回追葬が行なわれ、11世紀代と12世紀代の2回再利用されている。

第3号横穴は本横穴群の中では遺物の出土量的にも質的にも良好な資料を有する横穴であり、最も高いレベルに位置している。その出土遺物は6世紀中頃か6世紀後半の前葉という年代を与えられるため、少なくとも6世紀後半には築造されたと考えられる。従って、本横穴は本横穴群の中でも最も古い段階で築造された当初の横穴である。

第4号横穴では前述のとおり、既に開口しており倉庫として利用されていた横穴であり、改変を受けている事から遺物の出土がなかったため、明確な年代決定はできない。しかし、横穴の形態を他の横穴調査例と比較してみると、菊川町篠ヶ谷横穴群A群第1号横穴などと近似している点が多い。篠ヶ谷横穴群A群第1号横穴は出土遺物から7世紀後半と考えられ、本横穴も同時期の横穴と判断すると、7世紀後半の築造と考える。

第5号横穴でも、土器の出土はなかったため明確な年代決定はできないが、菊川町大淵ヶ谷横穴群C群第16号横穴や浜岡町薩田ヶ谷横穴群第4号横穴などに同様な形態を見ることができ、これらの横穴の出土遺物から7世紀末の横穴であるとの判断から、本横穴も7世紀末の築造と考える。

第6号横穴は前述のとおり、倉庫として利用されているだけでなく横穴の形態を全く留めていないため築造年代の判断はできず、資料として図示もできなかった。しかし、「遠江の横穴群」「静岡県文化財地名表」等によると“棺座”を有する横穴として「玉体横穴1基」と記載されており、第6号横穴は民家の建物のすぐ裏手に単独で存在する事からこの横穴に相当すると思われる。菊川流域には棺座を有する横穴はほとんど存在せず、本横穴群第9号横穴・東平尾橋本ヶ谷横穴群第2及び第3号横穴・大東町八ツ谷横穴群第2号横穴などにわずかに類例を見ることができ、7世紀後半に比定されている。従って、この記載横穴が本横穴と判断すると7世紀代に築造されたと推定される。

第7号横穴でも、土器の出土がなかったため、土器による年代決定はできない。しかし、馬具の引手壺が検出していることから、古いタイプの横穴と推察される。また、明確に比定できる同形態の横穴が見当たらないが、玉体横穴群第2号横穴とその形態が非常に酷似していることと横穴造営位置から考えあわせると、第2号横穴に続く横穴である可能性が高い。従って本横穴は7世紀中頃の築造と考える。

第8号横穴でも全く遺物が出土しなかったため、年代決定ができないが、大東町清水ヶ谷横穴群第1号横穴・浜岡町薩田ヶ谷横穴群第5号横穴・本横穴群第4号横穴と同様な形態を見る事ができ、これらの年代から本横穴は7世紀後半の築造と考える。

第9号横穴は、出土した遺物が7世紀前半から後半頃に比定されることから、7世紀後半には築造されたと考えられる。また、棺座を有する横穴として、大変貴重な資料である。

以上の結果から各横穴ごとに築造年代を与えてみたが、これを築造順に列記すると第3号横穴—第1号横穴—第2号横穴—第7号横穴—第8号横穴・第9号横穴・第4号横穴・第6号—第5号横穴の順に築造されたのであると考える。但し、第1号横穴1基のみ単独で違う谷筋に造営されており、第3号横穴が築造されて、引き続き同族関係の被葬者層のために連続して造られたと判断するのは危険である。同様に、第4・5号横穴もまた違う谷筋に造営されており、同族関係の被葬者層のために連続して造られたと判断するのは危険と思われる。今回、すべてを玉体横穴群という1つの遺跡として取り扱ったが、今後さらに、周辺の調査が進めば、場合によっては別の支群として扱う可能性も考えられる。

次に第1号土塚についてであるが、調査結果により17世紀中頃の江戸時代中期の遺構である事が判明した。「即身成仏」の言い伝えが残っていたが、その明確な根拠となる資料の出土はなかった。「即身成仏」では鉦などの遺物の出土や、空気坑のための竹筒を刺した孔の痕跡があると考えられているが、こうした遺物の出土や痕跡は一切確認できなかった。結果として江戸時代中期の座棺であるとし、現段階では断定できない。また、この埋葬については一般庶民のものとするには立地的にも特殊であり、今回の調査では不明な点も多い。今後のさらなる類例を待ちたい。

最後に、本発掘調査にあたり様々な問題点や障害に対して、担当者としての力量不足を痛切に感じた。関係各位の絶大なるご支援をいただき、こうして報告書として、ようやくまとめる事ができたが、内容的にみても多くのご批判があると思われる。ご一読いただき、ご教示願いたい。

#### 《引用・参考文献》

- 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』 1971 静岡県教育委員会  
『遠江の横穴群』 1983 静岡県教育委員会  
『大淵ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦』明星大学考古学研究所 1983 菊川町教育委員会  
『伊庄谷横穴群』 1983 静岡県教育委員会  
『池ヶ谷横穴群発掘調査報告書』 1984 小笠町教育委員会  
『岩滑清水ヶ谷横穴群・松ヶ谷横穴発掘調査報告書』 1988 大東町教育委員会  
『門屋横穴群石田2号横穴・新井平横穴群発掘調査報告書』 1988 浜岡町教育委員会  
『杉森横穴群D群発掘調査報告書』 1989 菊川町教育委員会  
『山田横穴群E群1号発掘調査報告書』 1990 菊川町教育委員会  
『静岡県史』資料編2 考古二 1990 静岡県

# 付編

## 玉体横穴群出土人骨について

山口 敏 (国立科学博物館 人類研究部)

### 1号横穴

脳頭蓋の小破片数点と歯16点が出土している。

頭蓋片には後頭骨と側頭骨の一部が含まれている。

歯は、切歯4・犬歯3・小臼歯4・大臼歯5からなり、歯根はほとんど保存されていない。1個体分と考えられる。咬耗は第1大臼歯では2度に達しているが、概して弱く、全体としてはラヴジョイのD段階(20-24歳)に相当する。残存している歯はカリエスは認められない。上顎の切歯はシャベル形を呈する。

### 2号横穴

69点の骨片あるいは歯が玄室の中央部と奥半分の壁際で出土している。各資料のとりあげ番号を実測図と照合してみると、骨の分布に規則性はなく、解剖学的配列も個体ごとのまとまりも認められない。また、数種の獣骨等も混在している。

成人女性の大腿骨が4個体分あるほか、成人男性の頭蓋冠破片が1個体分あり、さらに6歳前後の小児と4歳前後の幼児の顎骨が保存されているので、個体数は少なくとも7個体を数えることになるが、骨は断片的なものが多く、保存量は比較的少ない。

ある程度まで保存されている頭蓋は、熟年女性頭蓋1例のみである。頭蓋底と顔面は破損している。脳頭蓋の3主径は正確には計測できないが、最大長は174mmと推定される。頭頂結節がよく発達し、頭蓋冠の上面観は類五角形。前頭縫合が存在するが、約4分の3は閉鎖している。3主縫合もそれぞれ走行の半ば前後が閉鎖している。右側頭骨の関節結節に関節面の損耗がみられる。眼窩の上壁に、ごく軽度のクリブラが認められる。眼窩上縁孔は左だけに存在する。顔面骨格では左右の上顎骨の破片しか保存されていないが、上顎体前面は深い陥凹を示し頬骨下稜は細い稜をなしている。歯槽部が失われているため、全貌は明らかでないが、歯の脱落にともなう顔面の退縮変形があったものと推定される。右の上顎洞壁には病的凹凸が認められ、上壁は病的穿孔によって眼窩底に通じている。

ほかにもう1点、比較的保存のよい成人女性前頭骨がある。前頭縫合は、ない。この場合も左だけに眼窩上縁孔が見られる。クリブラはない。

成人男性と考えられる頭蓋片は、後頭鱗片と前頭鱗片だけで、とくに記すべき所見はない。

おもな成人女性下肢長骨の計測を表1、2に示す。

大腿骨は骨幹の計測できるものが5点保存されているが、大長や全長を計れる例はない。骨幹上部の横断示数はいずれも扁平型ないし超扁平型に属し、骨幹中央部も後面の付柱構造が弱く、矢状径が横径を凌駕する例は一例もない。これらの対には頸部前面の腸骨圧痕と、骨幹上部後面の第3転子が認められる。骨幹径の計測できる脛骨が3点あり、いずれも女性と考えられる。そのうち1点は最大長が300mmと推定され、藤井法による身長推定値は144cmである。骨幹中央部の横断示数は3例とも厚型に属し、断面の形は2例がヘルデリカの3型(三角形)、1例が4型(4辺形)である。

個体数の割合に骨の保存量が少なく、遊離歯がほとんど出土していないことと、ウマ、イヌ、



ウサギ、トリの骨が少量ずつ人骨に混在していることから、これらの骨は一次埋葬ではなく、骨化してから持ち込まれたものである可能性が考えられる。

#### まとめ

1号横穴では、比較的若い壮年1個体分と思われる遊離歯と少量の頭蓋骨片が、出土した。

2号横穴では、少なくとも7個体分の断片的人骨が少量の獣骨片および鳥骨片とともに出土した。人骨の内訳は成人5（男性1、女性4）、小児1、幼児1である。人骨の保存量は個体数の割に少なく、遊離歯もほとんど出ていないので、1次埋葬ではないと考えられる。

（人骨以外の骨片の同定に関しては、富田幸光博士のご助力を頂いた。）

表1 成人大腿骨計測値

骨番号 性・側	H 1 ♀ 右	H41 ♀ 左	H37 ♀ 左	H38 ♀ 左	H66 ♀ 左
骨幹上部最大径	30.5	30.5	28	28	29
骨幹上部最小径	19	19.5	20	21	20.5
上部横断示数	62.3	63.9	71.4	75.0	70.7
中央横径	26	-	25	23	(26)
中央矢状径	21	-	24	23	(24)
中央横断示数	80.8	-	96.0	100.0	(92.3)
中央周	74	-	76	72	(79)

表2 成人腿骨計測値

骨番号 性・側	H27 ♀ 右	H31 ♀ 右	H49 ♀ 左
最大長	-	-	(300)
中央横径	24	25	24.5
中央矢状径	19	19.5	18
中央横断示数	79.2	78.0	73.5

## 玉体横穴群発掘調査報告書

平成3年3月発行

編集・発行 静岡県小笠郡大東町教育委員会  
〒437-14

静岡県小笠郡大東町三保620番地  
TEL0537—72—2211

印刷 中部印刷株式会社



# 写 真 图 版

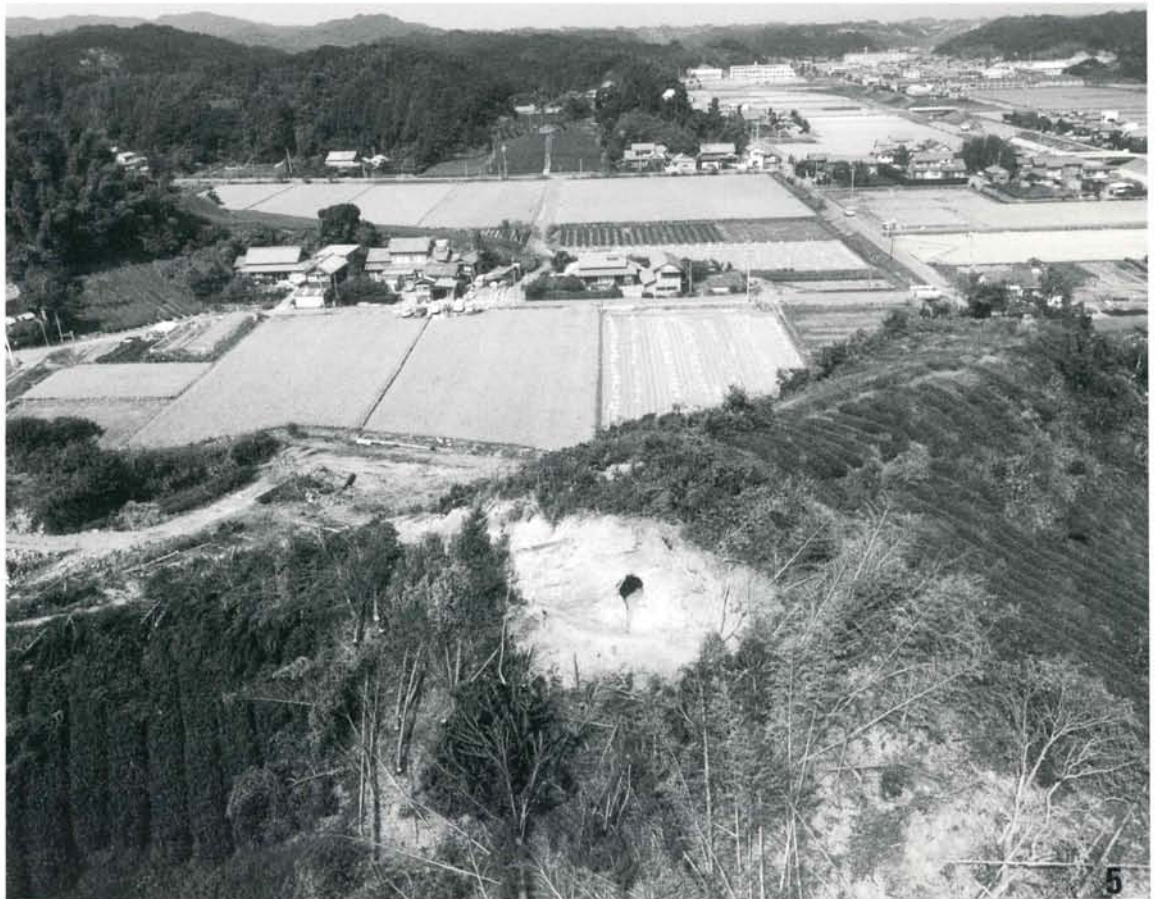
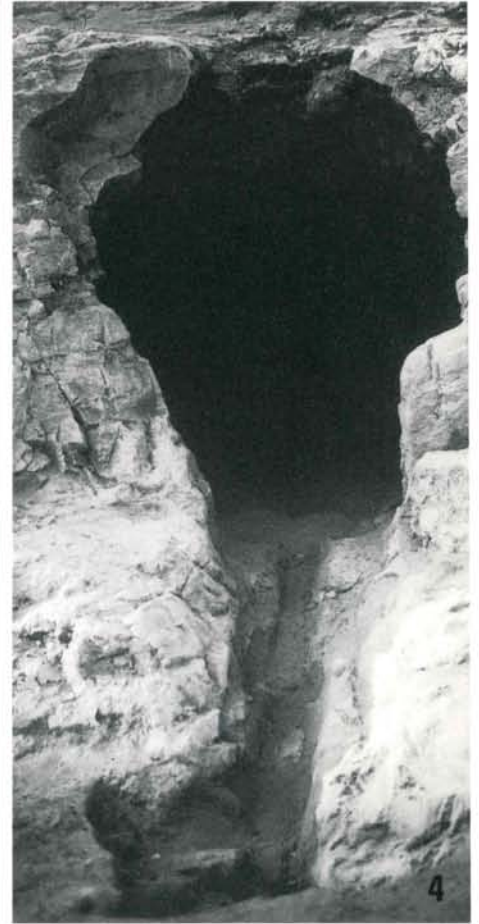
図版 1

1. 玉体横穴群 A 調査区調査前遠景 (南から望む)
2. 玉体横穴群 B 調査区調査前遠景 (南から望む)
3. 玉体横穴群 C 調査区調査前遠景 (南から望む)



図版 2

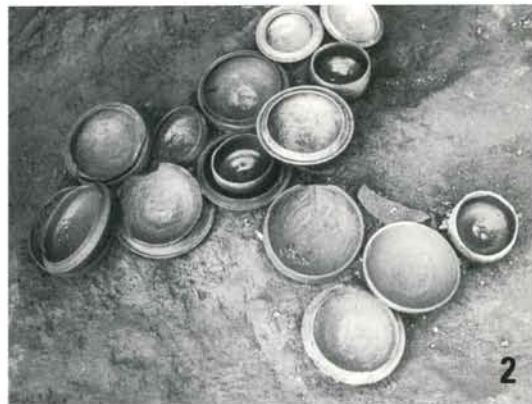
1. 第 1 号横穴調査前状態
2. 第 1 号横穴遺物出土状態
3. 第 1 号横穴墓前域状態
4. 第 1 号横穴完掘状態
5. 第 1 号横穴完掘状態 (空中撮影)





図版 3

1. 第 2 号横穴調査前確認状態
2. 第 2 号横穴遺物出土状態
3. 第 2 号横穴人骨出土状態
4. 発掘作業風景
5. 第 2 号横穴完掘状態（正前）
6. 第 2 号横穴完掘状態（上から）



図版 4

1. 第 3 号横穴封鎖石検出状態
2. 第 3 号横穴完掘状態
3. B 調査区完掘状態遠景（空中撮影）



図版 5

1. 第3号横穴直刀出土状態
2. 第3号横穴遺物出土状態
3. B調査区発掘作業遠景（第7号横穴検出）
4. 第3号横穴遺物出土状態
5. 第7号横穴周辺発掘作業風景
6. 第3号横穴遺物出土状態
7. 第3号横穴遺物出土状態



図版 6

1. 第 5 号横穴封鎖石検出状態
2. 第 5 号横穴完掘状態
3. 第 5 号横穴右側壁付近ノミ痕状態
4. 第 5 号横穴左側壁付近ノミ痕状態
5. 第 5 号横穴奥壁付近ノミ痕状態
6. C 調査区完掘状況 (空中撮影)





図版 7

1. 第 7 号横穴調査前確認状況
2. 第 7 号横穴完掘状態
3. 第 8 号横穴完掘状態
4. 第 9 号横穴完掘状態



図版 8

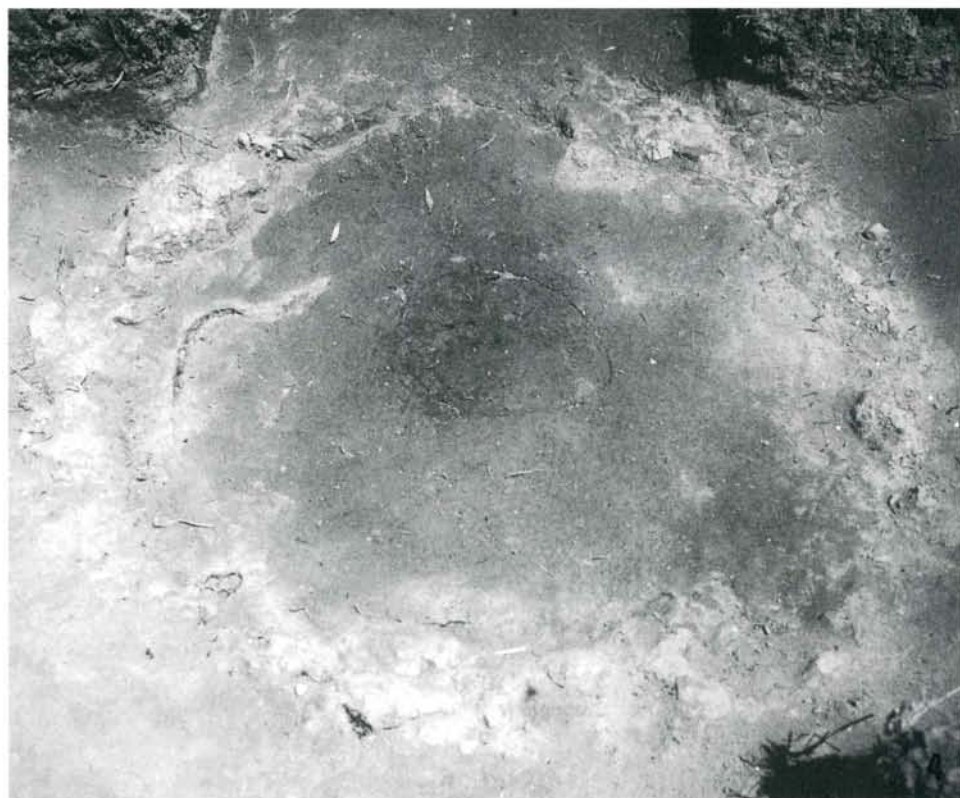
1.1 号土塚調査前遠景

2.1 号土塚調査前近景

3. 確認調査時プラン検出状況

4. ”

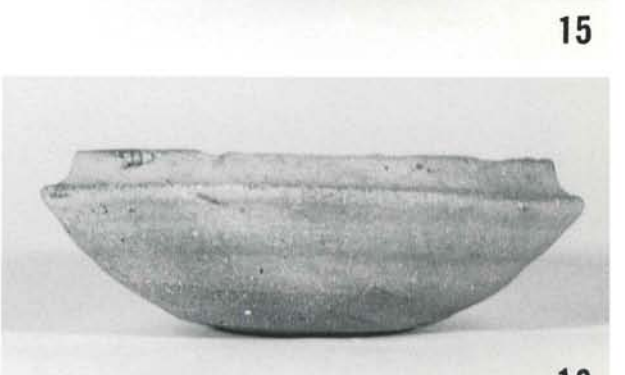
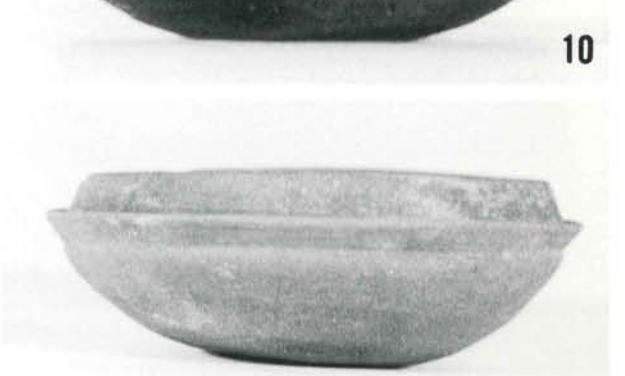
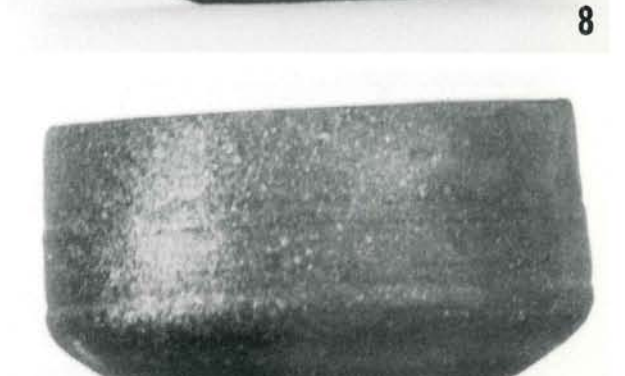
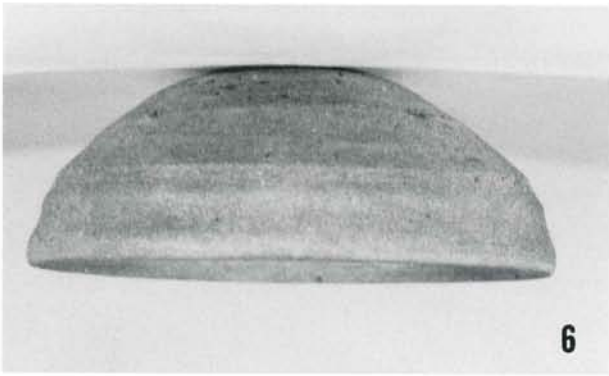
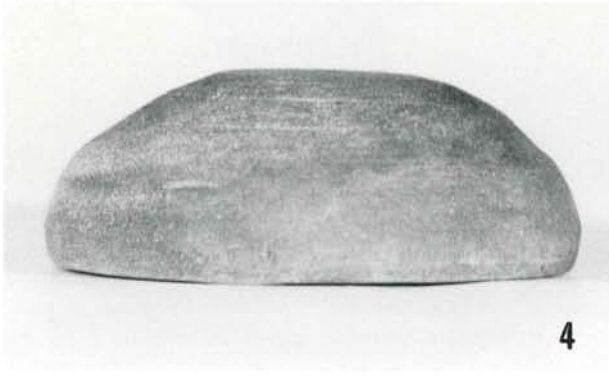
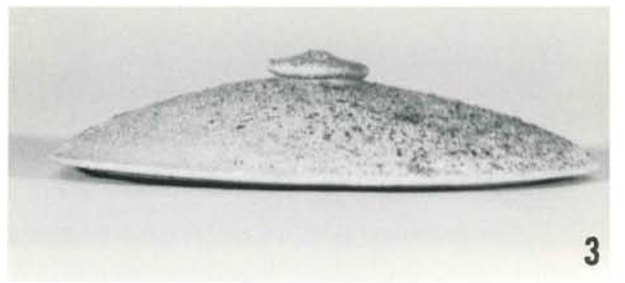
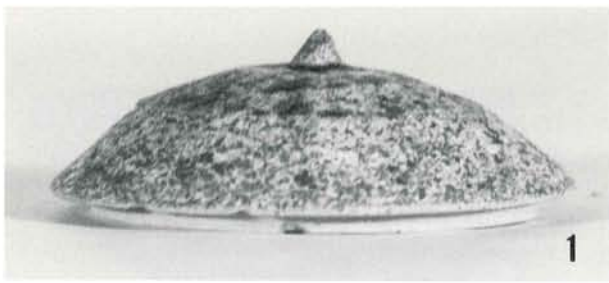
5. 完掘





图版 10

第2号  
横穴出土遺物



图版 11

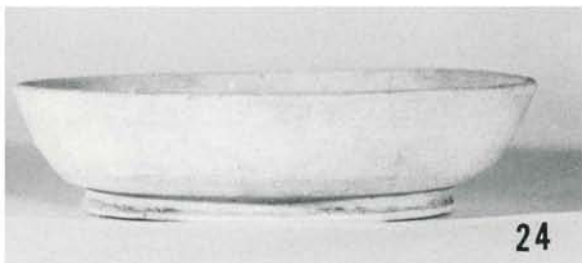
第2号横穴出土遺物  
(20~25)



20



22



24



25

第3号横穴出土遺物  
(1~13)



1



2



3



7



10



13

图版 12

第3号  
横穴出土遺物







图版 14

第 3 号横穴出土遺物  
(36 ~ 38)

第 9 号横穴出土遺物  
(1 ~ 3)



36



37



38



1



3

第 1 号土坛出土遺物



2

图版 15

第2号横穴出土遺物

(1・2)

第3号横穴出土遺物

(3~5、8~28)

第7号横穴出土遺物

(6・7)



1



2



3



4・5

8



10



20



9



17



18



13



12



21



22



19



23



14



28



27



26



24



25



6・7

図版 16

第1・3号  
横穴出土玉類

